内田百閒筆名考

――百間から百閒へ――

金　沢　　篤

はじめに

相変わらずの新型コロナ禍、StayHome。今夏は、敬愛する先輩の山本一生氏より「お題」を頂戴したようなもの。氏は「日記読み」の達人として知られるお方だが、夏の前に新刊なったのが、『百間、まだ死なざるや―内田百間伝[1]』(中央公論新社 2021 年 6 月)。500 頁を優に超える大作である。百閒フアンならずともワクワクするような贈物である。今度は「内田百閒伝」と山本氏とは高校のころからのご友人の阿部重夫氏から聞かされていて愉しみにしていたのだが、それがとんとん調子よく刊行されたとか、早速手にしたところ、まず驚いたのは、その標題の「百間」、字がちょい違うじゃないのということだった。改めて手持ちの文庫本を並べてみたが、そのどれもこれも「百閒」となっていて、「百間」は一つもなかった。それでも先ずは読んでしまおうと、直ちに「序章」から読み始めたが、すぐに、そのわけがわかった。山本氏は、次のように書いていた。

「本書は、内田百間の日記を通して、昭和十年代、さらには昭和戦前から戦間期を語り伝えようという試みのひとつである。･･･<略>･･･／　なお「百間」は、内田百間の故郷、岡山の百間川[2]から取った雅号である。戦後になってからは

---

[1] 本書の帯にも「没後 50 年、初の評伝」と明確に記されている通り、本年 2021 年は、内田百閒の没後 50 年の記念の年に当たる。それは同時に、内田魯庵の「罪と罰」の和訳でわが国にもようやく明確に名前を轟かせることになったロシアの不滅の文豪、「弱い心」のドストエフスキーの生誕 200 年の記念の年に当たる。さらに、本論攷の作業のさなかに思いがけず知ることになったのだが、わが国の仏教の父祖とも言うべき聖徳太子の 1400 年忌の記念の年にも当たるとのことである。

[2] 今、岡山に実在する「百間川」について記していてふと思い出したのであるが、わたしの故郷には、確か「百間町(ひゃっけんまち)」というのがあった。当時は西頸城郡百間町

正字である「閒」を使って「百閒」と表記することが多くなったが、この物語の扱う範囲は大半が戦前のため、あえて「百間」で通したい。もちろん、引用箇所は原文に拠った。」（14 頁）

なるほどと思って今度は内田百閒に言及していそうな手許の本などをあれこれ引っ張り出してみると、やはり「内田百間」と表記したものにはなかなかに遭遇しないのである。それもそのはず、戦後生まれのわたしなどが日頃お世話になって読む本などは、基本的に戦後に刊行された（再版本などの）本ばかりである。手許に百均で入手したような佐川章の『作家のペンネーム辞典』（創拓社 1990 年 11 月）があるので、引いてみる。「内田百閒 うちだ・ひゃっけん［一八八九 - 一九七一］」という項目があって、次のようにある。

「ペンネームは、若いときの俳号＜百閒＞をそのまま使用したもの。命名の由来は、彼が生まれ育った故郷岡山市郊外の旭川の放水路である百間川にちなむという（閒は間の正字）。／／　百間川には水が流れてゐない。川底は肥沃な田地であつて両側の土手に仕切られた儘、蜿蜿何里の間を同じ百間の川幅で、児島湾の入口の九蟠に達してゐる。（内田百閒『阿房列車』）」（73 頁）

50 年も昔に愛読した新潮文庫の『第一阿房列車』（1955 年 5 月）を取りだして確認する。引用箇所は 114 頁に。漢字は新字に、ルビも若干変えられているが、旧仮名遣いはそのままに正しく引用されている。「百間川」は、どこまでも「百間川」のようである。山本一生氏ももしかしたら、佐川［1990］は参照しているのかも知れない。とにかく、現代においては、内田百閒のことを山本一生氏のように、「内田百間」と表記する人などどこにもいないようなのは驚くばかりである。内田百閒が元々は「内田百間」と表記されていたということを

で、わたしの住む高田市（現上越市）から、百間町行きの頸城バスも頻繁に出ていたように思う。現在は、上越市頸城区百間町、ということは上越市に組み込まれてしまったようである。わたしは内田百閒の作品を読むよりもずっと早くから「百間町」を知っていたことになる。「百間町」に住む何樫さんや甘木さんのことが母や父の口から時折話題に上ったこともはっきりと覚えている。本論攷とは直接の関係はないが、例えば、宮本［1975.03］の「あとがき」の、「私の父の兄、宮本影幽は、・・・＜略＞・・・明治二十四年四月五日に病死した。影幽の弟で、後に私の父となる実成は、・・・＜略＞・・・思わざる兄の病死によって、同年九月二十三日、予備役に編入され、郷里に帰って、新潟県中頸城郡頸城村**百間町**、栄恩寺（東本願寺、大谷派）を嗣いだ。二十五年、親鸞聖人「川越の名号」の旧蹟地、姉崎浄福寺（西本願寺、本願寺派）井上教琢の二女で、父の教琢が木辺錦織寺から入婿したので錦織寺の孫にもなる政子と結婚し、二十六年に私が生まれた。父はお東、母はお西で、私は東西のあいのこになる。」（296 頁）に見える「百間町」である。

現代の一般読書人に広く知らしめることになるだろうという点でも山本氏の今回の「内田百閒伝」は、極めて意義深いと言える。

一通りこの大作を読み通したころ、これも阿部重夫氏より前触れされていたものであるが、この山本氏の新刊書の宣伝をかねて、相変わらず「読書人の友」のような『週刊読書人』の第 3401 号（2021 年 8 月 6 日）の第一面と第二面を使って、著者の山本一生氏と阿部重夫氏による仲良し対談が実現し、晴れて公けとなった。そこでも、当然ながら、その「百間」表記が真っ先に問題とされていたのである。いわば聞き手役の阿部重夫氏は、冒頭で「なぜ「百閒ではなく「百間」か？」との問題を投げかけ、それに対して、著者の山本一生氏は、次のように応えている。

「百間が古字の「閒」を使い始めたのは昭和十九年で、本格的に使ったのは戦後からです。・・・＜略＞・・・名前の由来はもちろん、『冥途』『旅順入城式』『南山壽』などの主たる作品集が「百間」で刊行されていることなど、一般的にはあまり知られてないのでしょうね。・・・＜略＞」

それを阿部氏は「とことん調べた上で、意識的に選択したというわけですね。」と承け、山本氏は、さらに「晩年になって百間がどうして古字にしたのかわからない、人々を惑わせようと思ったのかも。」と説明し、阿部氏はそれを「百間のいたずら好きの面が出ているのでしょう。」と承けて、その問題には一応のケリをつけた形になった。

山本一生氏は、今回の「百間伝」の終盤、「第二十四章　東京焼盡、滂沱の涙」（440 頁）の「百間から百閒へ」との見出しを持つ最初の節を、「昭和十九年（一九四四）六月十五日、・・・＜略＞・・・八幡製鉄所を目標に北九州一帯を爆撃した。」との文から始め、以下の記述で結んでいる。

「七月には、戦中で最後の文集となる『戻り道』が青磁社から刊行された。・・・＜略＞・・・／『戻り道』の背文字や題簽、送り状では「百閒」となっていて、このころから次第に「閒」を使用するようになる。ちなみに雑誌では、昭和十四年七月号から連載を始めた『海運報国』では「百閒」である[3]。ただし、同時期の他の雑誌や新聞は「百間」だし、初出未詳のものも多く、いつから「百

[3] 山本氏が参照・確認している『海運報国』誌は、残念ながらわたしは未見である。目次などを含め、既にそこに活字印刷された「内田百閒」表記が用いられているとわたしは理解した。

閒」を使い始めたのかは定かではない。」（442 頁）

そうである。これが、阿部氏との対談で、山本氏が、「百間が古字の「閒」を使い始めたのは昭和十九年で、本格的に使ったのは戦後からです。」と言い、「晩年になって百間がどうして古字にしたのかわからない」と承けたことの実質なのである。ただし、山本氏の記述はある意味曖昧で矛盾しているのではないか。一方で「昭和十九年」に使い始めたと言いながら、また一方で、昭和十四年に既に「百閒」表記のあることを伝えている。ならば、百閒が「百閒」表記を使い始めたのは、「昭和十九年」ではなく「昭和十四年」であるとすべきだった。百閒がかつては「百間」表記を使っていたが、ある時期から「百閒」表記をも使うようになった、というのが、仮に事実だとすれば、結局わからないのは、百閒が「百間」表記から「百閒」表記に変えた時期とその理由であろう。だが、本当にそうなのだろうか？　ことここに至ると「極微文献学」を看板にしているわたしなどにとっては、恰好の「お題」を頂戴したことになり、「ここはひとつ」と手間暇のかかる作業に乗り出した、という次第。しかも、時間はあるものの相変わらずの StayHome であり、あちこち出歩いて調査することは出来ない（というより、もうあちこちには出向きたくない）。机に坐り、パソコンに向き合った状態での、虚しい沙門しい作業である。その際に助けとなるのは、いつものことながら、誤記誤植の避けがたい、（伝聞と言うべき、活字印刷されたような）「文字による書誌情報」ではない、とにかく「実物を手に取ること」、それが適わぬ場合は、その「画像」を探してしっかりチェックすることであろう。当然のようにその作業は困難を極めることが予想される。

山本氏の今回の「百間伝」は、本当に力作であり大作である。方法的にも見事と言う他なく、資料を精査し、そのエヴィデンスを、巻末に「参考文献」として詳細に掲げている。そのラインアップを見るだけでも、もう頭の下がる思いである。だが今の場合、わたしの目的は、内田百閒の生涯とか、その全体ではない。まさしくトリヴィアルな極限られたものである。限られた条件下で限られた時間内に遂行する頼りない紙風船のように吹けば飛ぶような作業である。やはり、最良の導き手となるのは山本氏の今回の大作『百間、まだ死なざるや―内田百間伝』だろうか。

Ⅰ．手始めはやはり文献の渉猟と乱読

例えば、手許の内田百閒［1980.10］、旺文社文庫の『続百鬼園随筆[4]』の巻末に、書誌学的に有益な情報を与えるはずの、平山三郎氏による「「続百鬼園随筆」雑記」が収録されている。そこに次のような一節があるのを出発点としようか。「谷中安規は前年、「王様の背中」挿絵版画のために佐藤春夫から紹介されたばかりの版画家である。この時分の安規あて百閒用件ハガキが三四通残っているので紹介しておこう。百閒書簡はいつでもカタカナである。

九年四月 26 日（葉書）／　琴書雅游録ガ週刊朝日ニ出マシタ故続百鬼園随筆ニ収録スル事ガ確実トナリマシタ　ソレニツキ「弾琴之図」ヲモウスグニ用意シテ戴キ度ク御都合ツキ次第「写生」ノ件オ願ヒ申シマス　百閒

[4] カバーの表紙折り返しに写真入りの著者の内田百閒の紹介欄がある。そこに「うちだ・ひゃくけん」と表記されていることも驚くべきことである。わたしはこれまで、本論攷冒頭で引いた佐川氏の『作家のペンネーム辞典』にあるような「うちだ・ひゃっけん」と促音便を用いてのように発音していた。本当だろうか。表紙をめくって最初に出遭うのが、「百鬼園先生撫箏之図／谷中安規・画」と説明のある口絵（写真）、その次が（横書きで）「旺文社文庫／続百鬼園随筆／内田百閒著／旺文社」とある扉か。続いて（縦書きの）「続百鬼園随筆目次」と始まる目次（3-4 頁）があり、続く 5 頁目には、（縦書きで）「続百鬼園随筆」とだけある頁（これは第二の扉と言うべきか？）があり、その裏面（6 頁）の末尾には、「［編集部註記］著者の遺志により、かなづかいは原文のままとした。漢字は正字体を新字体・略字体にあらためた。ただし、人名・地名をはじめ、一部を正字体とした。」とある。どうも、この［編集部註記］が味噌である。「著者の遺志」とあるから、これは著者である内田百閒の文章についての「註記」と考えるべきなのだろうが、「かなづかいは原文のまま」はいいとして、漢字の方は、「著者の遺志」とはかかわりなく、編集部で勝手に適当に変えた」と言っているのだろうか。またこの文庫本には、著者内田百閒とは別の、内田道雄氏による「解説」と平山三郎氏による「「続百鬼園随筆」雑記」と呼ばれる文章が収録されている。こちらの方には、その［編集部註記］の原則は適用されないと言うべきなのだろう。彼らは、通常の「かなづかい」と通常の「漢字づかい」で自身の文章を書いているはずだが、それぞれの中には、いわゆる「著者」に当たる内田百閒氏などの他の人の文章からの引用も含まれているはずである。それに関しては、［編集部註記］は適用されないということだろうか。「内田道雄氏や平山三郎氏の勝手たるべし」ということなのだろうか。このように今しつこく書いているのは、わたし自身が、わたし自身の作業の気の遠くなるような作業の困難さを予感しているからである。わたし自身としては、先に見た山本一生氏の「あえて「百間」で通したい。もちろん、引用箇所は原文に拠った。」に倣って言うならば、「通常通り「百閒」で通したい。もちろん、引用箇所は原文に拠った。」と言うつもりである。この「引用箇所は原文に拠」るという原則は、あらゆる文献学の忽せに出来ない「基本原則」である。これを履行出来ない場合には、その旨を明記する必要があるということである。

同　五月一日（葉書）／　続百鬼園随筆ハ五月中旬ニ出ス事ニナリマシタノデ　弾琴之図ヲスグニ版ガ貰ヒ度イト本屋デ申シマス故ドウカナルベク早クオ運ビノ程願上ゲマス　百閒」（216 頁）

いかが。平山氏が「昭和九年」に、百閒が版画家の谷中安規氏宛に出した葉書二通の文面をそのままに紹介しているのである。わたしなどからすれば、その葉書の写真が掲載されていれば百閒の書く字がどのようなものかも知れて嬉しいのだがと思うのであるが、そうもいかない。そこに「百間」ではなく「百閒」とあることを見て、実はわたしは驚喜したのである。やはり、そうか、と。だが、「用字、改行、句読点ナシ、」等すべて原文のままであるが、特に判りにくい箇所は一字アキとした。略字は正劃字体に統一した。」と凡例にある、平山三郎［1986.03］、旺文社文庫の『百鬼園の手紙』の中に、問題の葉書二通も収録されているが、そこには、「百閒」ではなく「百間」とあるのには、やはりまた驚いてしまったのである。さらに「用字、改行、片假名の使用、句讀點ナシ等、すべて原文の儘であるが、讀み易くするため、文章の切れる箇所は一字アキとし、畧字は正字に統一した。」と凡例にある内田百閒［1973.04］（講談社版全集の書簡）の中に収録された同一葉書の文面に、やはり「百間」とあるのを認め、さらに「用字、改行、片假名の使用、句讀點ナシ等、すべて原文の儘であるが、讀み易くするため、文章の切れる箇所は一字アキとし、略字は正字に統一した。」と凡例にある内田百閒［1989.07］（福武書院版全集の書簡）の中に収録された同一葉書の文面に、やはり「百間」とあるのを認めると、もう驚きどころか、がっかりして項垂れてしまった。だが、凡例の最初に「書簡の配列は、編年體とした。」とあるので、奮起し、「百閒」表記の現れるのは何時かと辿ってみたところ、「昭和十四年六月十七日　封書　國民學術協會御中」宛とある手紙の末尾の署名が「内田百閒」とあった。これが書簡番号 94 番。それに気を取り直して、さらに追いかけてみたところ、「昭和十六年十二月二十七日　コンニヤク版葉書速達」とある谷中安規宛のものの締めの署名はまたも「内田百間」となっていた。これが収録書簡番号 112 番。これ以降、「昭和四十四年十月三十一日　絵葉書」という、署名のない、上田健次郎宛書簡番号 462 番に至るまで、「百閒」どころか「百間」といった表記も一切現れないのである。因みに書簡番号 1 番は「年月日不詳」の夏目漱石宛の「榮造」という署名のある手紙である。書簡番号 2 番は、「大正十一年八月十六日　封書［墨書］」という北村猛徳宛の「榮」という署名のある手紙である。結局内田百閒

[1979.07]所収の全 462 通の書簡のうち「百閒」の表記のある署名を持つものは、先に見た、「昭和十四年六月十七日」の書簡番号 94 番ただ一通ということになる。この「内田百閒」の署名は果たして信用してもいいのだろうか。残念ながら、この國民學術協會御中宛の「内田百閒」の署名のある手紙は、「書簡の配列は、五十音順・個人別、年月日順とした。」と凡例にある内田百閒[1973.04]収録の書簡の中には探し出せない。収録書簡には書簡番号も附されていないし、解題もないが、同書月報末尾の平山三郎記とある文章の中に、「お蔭をもって収録書簡・八百四十通。」とある。平山三郎[1986.03]巻末の平山氏の「百閒先生の手紙」によれば、「第十巻全六二五ページのうち書簡は二一六ページを占め、書簡の数としては八四二通を収めている[5]。」（322 頁）とある。

わたしの仮説とは、ワープロなどのない時代のこと故、「百閒も百間も同じ、本人は手書きしただろうから、適宜それを使い分けている。活字印刷の場合には、なぜかある時期までは一様に「百間」となっただけ。」というものであり、この平山氏の記述は、「戦前・戦中」どころか正真正銘の「戦前」に、百閒は自筆ではその筆名に「百閒」と表記していたことがあることを証立てるものと思われたからである。百間川の「百間」は川の名前、内田百間／百閒の「百間／百閒」は筆名とは言え、人名である。本論攷冒頭でも見たように、若い時の「百間川」ゆかりの俳号も端から「百閒」と手書きされたことがあったのではないか、それが「百間」と伝えられているのは、百間自身の意図によるものではなく、活字印刷上のやむを得ぬ事情によるものであったのではないか。百閒自身が自らの「筆名」とその変遷について語っているものが多くなく？　また百閒について語っている知人や文芸評論家などの書いたものの中に、その「表記の変化」に言及したものが少ない？ということも、わたしの仮説の拠り所となっている。よく言われるようだが、「閒は間の正字である」ということは「間は閒の略字である」。これは百閒の本名の「榮造」と「栄造」の「榮」と「栄」の関係で

[5] 内田百閒[1973.04] 387 頁の書簡篇の第一頁には、「計　八百四十二通」との記載はある。いちおう、この八百四十二通のうち、「百閒」表記の署名のある書簡は以下の五通だけである。その宛先と日付を列挙しておくならば、北村孟徳宛「**昭和十五年十二月二十四日**」「昭和十七年六月吉辰」（コンニヤク版）、平山三郎宛「昭和十八年三月二十三日」、村山古郷宛「昭和十七年六月吉辰」（コンニヤク版）、村山貞子宛「昭和二十年三月二日」である。「百閒」表記のある書簡のうち、最も早いのは、北村孟徳宛の「昭和十五年十二月二十四日」。百閒先生は、その時点で、「百閒」表記をしたとの証拠にはなるであろう。

ある。この正字の「榮」と略字の「栄」の間には、文字通り画数に大きな違いがある。百閒に言わせると「造」の方も、「しんにゅう」も違うし、作りの方も上の部分は「牛」だとのことだが、わたしのパソコンではその違いを出せないのである。森鷗外の「鷗」と「鴎」もそうである。もう随分前から「鷗外論」に着手しているが、パソコンもワープロもない手書きの時代だったら、鷗外鷗外と頻出する鷗を書くのがさぞ面倒だったのではないかと思い、きっと略字で済ましていた筈である。ところが、画数の点からすると「閒」と「間」は同じ。本当に、両者は正字と略字の関係と言えるのだろうか。調べてみると、そのへんがやはり曖昧である。「閒」は「間」の正字と言い得るが、同時に「閑」の正字でもあるなどの説明を見ることもあるのである。やはり「閒」の字はかなり特殊な漢字のようだ。現代でも「閒」という漢字は、わたしとしては「百閒」の名前でしかお目にかからない。需要が極端に少ないので、通常の印刷所には「閒」という活字が用意されていなかったのではないか、とまでわたしは思ったのである。活字印刷全盛の時代においての表記である。百閒が使う使わないの問題ではなく、印刷所／出版社が持っているか持っていないか、使えるか使えないかの問題なのではないか、ということである。この「内田百閒」表記の推移・変化に言及する人たちの頭には、「手書き原稿」と「印刷表記された作品」の間に厳として横たわる「印刷」という重要なプロセスへの思いが欠如しているのではないか。「百間川」は「百間川」で、それに因んだ百閒の俳号「百間」である。その百間川も元々は「百閒川」と手書きされていたのかも知れない。確か、百間川は人工的な川である。たぶん江戸時代に作られた川だと想像するが、その当時は、きっと「百閒川」と手書きされていたのではないかとも想像してみるのである。が、明治以降の文明開化の時代にあって、活字印刷が始まってみると直ちに「百間川」と印刷表記されるようになったのではないか。あるいは、画数も同じ字形もほぼ同じなのだからもしかしたら江戸時代の初めから「百間川」はやはり「百間川」だった可能性もある。

とにかく朝日新聞と讀賣新聞を StayHome にはおあつらえ向きの「聞蔵Ⅱ」と「ヨミダス歴史館」で見る限り、戦前・戦中の新聞の中に活字印刷された漢字「閒」などは、まずお目にかからないのではないか。いや、それは皆無ではない。わたしが知るところだと、「人名や書名などの固有名詞」で思いつくのは、「内田百閒」という人名（筆名）を除くと、書名の「病閒録」「藝林閒歩」くらいだろうか。問題の「百間川」が江戸時代の古文書などで「百閒川」とあ

ったりすると誠に都合がいいとは思うのだが、そこまで調べることは出来ない。岡山に大水があって、百間川が氾濫したといった記事を朝日新聞などでは見いだせる[6]が、やはり「百間川」は「百間川」だ。綱島梁川の『病閒録』は、明治38年（1905年）に金尾文淵堂から刊行されたが、その単行本には『病閒録』、昭和2年（1927年）に岩波文庫に入った『綱島梁川集』の中では「病閒録」とあるのに、朝日新聞では広告欄も含めて『病間録』表記である。どうも新聞では「閒」という漢字は思うように使えないのでないのか、と思われるほどである。また医学博士の太田正雄の筆名、木下杢太郎の著書『藝林閒歩』は、昭和11年（1936年）、岩波書店の刊行である。文字通り戦前・戦中の刊行書であるが、これが、朝日新聞でも、そのまま『藝林閒歩』として出てくる。書評欄であろう、書名が見出しとして大きな活字で組まれている。書き手は斎藤茂吉、本文にも「藝林閒歩」としっかりと印刷表記されて出てくるのである。書評欄で、単行本の書名として明確に『藝林閒歩』とあるものをさすがに『藝林間歩』と紹介し、紹介するわけには行かないのだろう[7]。戦後、『藝林閒歩』という雑誌も刊行されている。「閒歩」とはどういう意味かと、『広辞苑』を引いてみると、「閑歩」という普通名詞は立項されているが、当然ながら「閒歩」はない[8]。意味は、「ぶらぶら歩くこと。そぞろあるき。」とのこと。手許にある常用の百均で入手した『広辞苑』第二版、昭和44年5月に刊行されたものによる。その第二版には、「内田魯庵」どまりで、「内田百閒／百間」は立項されていないのである。戦後、新聞でも雑誌でも、単行本でも「内田百閒」の活字印刷表記が大手を振ってまかり通るのは、百閒の断固とした気まぐれなどではなく、印刷技術や、国や団体の漢字政策や方針などに負うところが大きいこと、そしてそれを筆名としている、「旧仮名遣い、旧漢字、正字」大好き人間の内田百閒の社会的な地位の向上によるのではないか。そして、その百閒の好みを常に刷り込まれてきたかの弟子筋のお二人、平山三郎氏と中村武志氏などの尽力のたまものと言うべきである。なにせ、内田百閒は、栄えある芸術院の会員に推挙されても「イヤダ

6　聞蔵Ⅱによれば、1893年（明治26年）10月19日の『朝日新聞』朝刊一頁六段には「百間川は東西両堤決潰したる爲・・・」とある。

7　先取りして言うなら、「閒」という漢字が大新聞『朝日新聞』紙への初登場なのではないか、そして『朝日新聞』紙上の斎藤茂吉によるこの格調高い書評が、内田百閒に、「百閒」表記を深く意識すさせることになったのではないかとわたしは想像しているのである。

8　後出『増補 字源』には、「閒」の項目の下に、しっかり記載されている、「しづかにあゆむ。」（2082頁）と。

カラ、イヤダ」と断って新聞だねにもなるほどの大物なのである。誰にとっても関心のある人物をどのような呼称で呼ぶかは常に問題である。それが人によってコロコロ変わるようだと、読者は戸惑ってしまうに違いない。社会にいらぬ波風が立つ。鷗外は鷗外である。鷗外は鴎外である[9]。本名は森林太郎。漱石は漱石、朝日新聞に小説を連載する時には、ただの漱石である。きちんと問題にするときは夏目漱石、だが、本名は夏目金之助とのことである。例の『作家のペンネーム辞典』の「森鷗外」の項目には、次のように記されている。

「この＜鷗外＞というペンネーム、本人は快く思わず、明治三十年（一八九七）八月の『そめちがへ』が＜鷗外＞名で執筆した最後の作品となる。／

父をまたその生涯の一部分の号に過ぎない「鷗外」と呼ぶのは私としては不満なので、父は少なくとも小倉へ行ってから後は鷗外という号を用いず、『鷗外漁史は死せり』という文章さえ発表している。その後は主なる創作翻訳評論には「森林太郎」と署名した。創作では鷗外と署名したのは明治三十年八月『新小説』に出た「そめちがへ」がおそらく最後であろう。（森於菟『父親としての森鷗外』）」（418-419 頁）

この「百間」or「百閒」は、そんなに単純な問題ではない。けっこう複雑な要因が重層的にからんでいると思われる。本名（戸籍上）は「内田榮造」というのであるが、それを本人は「榮造」とも「栄造」とも書き得るのである。わたしの場合は戸籍上の名前は「金澤篤」というのだが、通常は「金沢篤」と署名することにしている。だが、わたしの思惑とは別に、「金澤篤」とされることが多々ある。ある意味では有難いようだが、勘弁して欲しいと思ったりもする。また、学生時代にわたしが指導をしていただいた先生は前田専学先生であるが、名刺やお手紙、お葉書を見ると、「前田專學」となっている。今は手書きでそのようなやり取りをする時代ではないから、「專學」という部分はワープロなら簡単に打ち出せるが、手書きの時代だと、そもそもあの「專」という字の正しい書き方を知らないのである。その時代、見よう見まねで書いてみたこともあるが、結局、通常は「専学」で済まさせていただいたと記憶する。わたしの奉職する駒澤大学も、昔は「駒沢大学」で済ませていた筈だが、ある時

[9] ちなみに、聞蔵Ⅱで検索する際に、「森鷗外」と入れるとエラーとなり、「森鴎外」は OK。「森林太郎」や「森鷗外」がヒットする。「内田百閒」と入れるとエラーとなり、「内田百間」は OK。戦前は、基本的に「内田百間」、戦後のある時期から「内田百閒」がヒットする。

期から大学名は「駒澤大学」と表記するようにと大学からお達しがあった。東急田園都市線の最寄りの駅が「駒沢大学」で、地名も「世田谷区駒沢」だが、大学名は、それらと明確に区別される「駒澤大学」、とのお達しである[10]。大学の同僚にも「平井俊榮」や「伊藤隆壽」といった先生がおられた。どちらの場合も「俊栄」と「隆寿」で済まさせてもらった。今の内田百閒も、本名の「内田榮造」は「栄造」で済ましてしまうに違いない。同じように、筆名の「百閒」と「百間」もそのような関係なのではないだろうか。俗字表記というか略字表記というものが「百間」で、正字表記をしたら「百閒」か？　百閒先生は若い時は、気楽に「百間」を使っていたが、年をとって偉くなったので正字表記を使うようになったということだろうか？

こんなにも、時代によって、表記が、内田百間⇒内田百閒と劇的に変わり、現代では、見事に「内田百閒」といった表記に定着している事実が厳然としてある。これは何故かというと、その事実を明確に指摘して、結果的にその事実を喧伝することになった山本一生氏は「わからない」とし、それを承けて、阿部重夫氏は、百閒先生の「いたずら好きの面」に帰したかのようである。わたしが不思議に思うのは、おそらくその事実に気付いている者たちが、百閒自身を含めて大勢いるはずなのに、そのことに敢えて言及する者がほとんどいないことである。立派な全集がメジャーと言うべき大手の出版社によって二度までも刊行されているというのにである。わたしが知らないだけかも知れないが、これは彼らにとって、内田百間⇒内田百閒の変化は、筆名の変化とは考えられていないということなのではないか。百間も百閒も同じだ、どちらでもいいと考えられていることを示しているのではないか。彼の場合、本名（戸籍上の）は内田榮造、筆名が内田百閒。本名を内田栄造と書こうが内田榮造と書こうが、構わない。本人も適当に書き流しているのではないか。森鷗外は、一時期森鴎外と表記印刷されたことがあったように記憶する。鴎外／鷗外は筆名で、本名は林太郎、森林太郎が本名であることも承知のことだ。夏目漱石も漱石は筆名、本名は金之助。

結局は、本人が自作を発表する際に、どのように署名したかという問題に尽

[10] 関係者は、必死で「駒澤大学」表記を励行しているのだが、部外者は、平気で「駒沢大学」表記を用いたりする。

きるのではないか。StayHome を口実にフィールドワークを怠って、あれこれ空想をたくましくしているだけだが、自筆原稿、手書きの手紙や日記の中で、書き手達が、百閒先生をどのように表記しているかこそが、興味あるところである。私信の類いは、基本的に本名でやりとりしているだろうし、そう多くは参照することも出来ない。わたしが気に懸けているのは、あの芥川龍之介が残している有名な手書きの「百間先生邂逅百間先生図」などだ。明らかにそこでは芥川は自筆で「百間」という文字遣いをしている。当時の単行本や雑誌、新聞に掲載されるものは、まずは「百間」である。作家が作家に対して手紙などを出す時は、ペンネームを用いるものだろうか。百閒が師の夏目漱石宛の書状などで「百閒」などと署名するものだろうか。芥川の「百間」表記は、やはり印刷して公にされた筆名を反映させたものに過ぎないと思われるのである。作家同士が初対面の折などに、筆名を刷込んだ名刺[11]などを交換するものだろうか。この内田百閒の「百閒」表記の真相は、手書きの原稿レベルでしか問題に出来ないことのように思われるのである。

---

[11] 興味深い写真・画像から成る内田道雄[1993.12]には、百閒の名刺二枚が掲載されている。いつの時代のものかは不明だが、そのうちの一枚が興味を引く。活字印刷で「内田榮造(正字)」とあり、その「榮造」の左横に手書きで「百閒」とあり、住所の番地が手書きで「十二」番地から「十四」番地に訂正されているものがそれであるが、写真の横に「戦災で焼け出される以前の名刺を訂正し、掘立小屋に移ってからも使用したもの」と説明書きがある(51頁)。「焼け出される以前の名刺を訂正」とあるのは、番地のことを指して、筆名「百閒」の添え書きは、該当しないものだろう。ということは、百閒本人は、戦前・戦中時も筆名として「百閒」表記を正式に？用いていたことを意味しているのではないか。にも拘わらず、活字印刷された単行本などでは、まだまだ「百間」表記が蔓延っていたということである。また、ついでに記しておくが、同書の前頁の 50 頁に、「戦時中の最後の出版物」と言われる昭和 19 年 7 月に刊行された問題の『戻り道』の書影が掲載されている。表紙に右書きの墨書による「戻り道／内田百間著」とあり、猿の絵(本文の 11 番目の駒絵の二度使い)のあるものだが、後で言及するように、戦後昭和 21 年 7 月 30 日に刊行された再版本のカバーの書影であって、初版のものではない。初版には、右書き墨書ではあるが「戻り道／内田百閒著」とあり、絵も明らかに違うのである。また、後で問題になろうかと思うのでさらに附記しておくが、内田道雄[1993.12]の 51 頁の本文には、「内田百閒の刊本には既刊の著作本と編纂本の目録が付載されるのが常であるが、」とある。だが、内田百間が内田百閒となる戦後になると、この著作目録の書名にある「百間」までが、一斉に「百閒」表記に変わるのは、いかがなものか？　この「右へ倣え」は、勘弁して欲しいものである。

Ⅱ．内田百閒の本名と筆名～「百閒」表記初出の痕跡を求めて

とりあえず、内田百閒の本名と筆名をまとめてみておきたい。いちおう、現代では作家、内田百閒は、この「内田百閒」表記で統一されており、山本一生氏のように特別なこだわりのある場合に限って「内田百間」表記が用いられる。書誌的には、書物の場合は、基本は奥付に記載された印刷表記が用いられるはずだが、実際の運用に際しては、「百閒」という表記をとれなくて、よくわかる「百間」が用いられる場合もある。図書館の検索などでヒットする表記をそのまま信ずることは出来ないと考えられる。これは国会図書館などの場合にも言えると思う。初出が新聞や雑誌の場合、百閒先生のは比較的短い随筆や小説であることが普通で、単行本にする場合は、単行本の奥付の表記が、初出のものと同一であるかもはっきりしないのである。エッセイの標題なども、単行本に収録される際に改題されることがある。

『聞蔵Ⅱ』で「内田百間」を検索したところ、『朝日新聞』への初登場は、1922 年（大正 11 年）1 月 24 日の第 6 頁の「學藝たより」欄に、「内田百間氏「冥途」を近日中稲門堂より發刊す」とある。二番目は、1922 年 4 月 6 日の第 4 頁の下段に稲門堂書店の『冥途』の大きな広告である。「内田百間」である。三番目は、随分開いて 1933 年（昭和 8 年）9 月 11 日第 5 頁に、「内田百間」名で「百鬼園睡筆（1）」が掲載される。4 日続きのもので、「百鬼園睡筆（4）」まで。これは、売れに売れたらしい百間の当たり作、『百鬼園随筆』の冒頭の「短章二十二篇」のうちの三番目の「虎列刺」と四番目の「一等車」と五番目の「晩餐会」に当たる。このことは、手許の内田百閒［1980.09］の巻末収録の平山三郎氏の「「百鬼園随筆」雑記」にも、紹介されているが、「（3 回連載）」（287 頁）とあるも、これは「（4 回連載）」の誤りである。4 回で 3 章である。内田百閒［1980.09］の口絵に「昭和八年十月」に刊行された「初版特製本表紙」の写真が掲載されているが、そこでは当然ながら「内田百間」である。朝日新聞連載時の「内田百間」と初版単行本の「内田百間」は一致していると言える。このように朝日新聞では戦前・戦中は、ずうっと「内田百間」である。

【本名】
内田榮造
　　栄造

【号・筆名】

百間（←百間［閒？］川）　流石（←夏目漱石）　盧橘子　雪隠 etc.
百閒　内田流石（『文章世界』）　内田盧橘子[12]
内田百間
内田百閒　蛆田百減（『贋作吾輩は猫である』）
百鬼園（←百間／百閒＋借金？）
　鬼苑

刊行年	書名	函（カバ）	表紙	背表紙	扉	序/目録	奥付［印刷］
1922.2	冥途	百間			百間		百間
1933.10	百鬼園随筆			百間	百間		百間
1937.6	随筆新雨[13]	百間？	百間	?	?		百間
1937.12	北溟[14]		**百閒（筆）**	百間（筆）	百間？		百間
1938.9	百鬼園随筆選（文）		百間	百間	百間		百間
1939.2	鬼苑横談[15]			百間（筆）	**百閒**（筆）/ 百間		百間
1939.10	菊の雨			百間（筆）	?		百間

[12] 内田百閒［1972.06］巻末の平山三郎氏による「解題」に「初期の文章に就いて」（493-494 頁）というのがあって、百閒の初期の筆名が網羅的に紹介されている。そこでは、百閒は終始「百間」表記である。

[13] 本書に関しては実物を未見。通常は昭和 12 年 10 月に小山書店より刊行されたということになっているが、田村欣実氏によるネット上の「百閒図書館」には、二種類の書影が掲載されていて、値段も内容等も同じものだが、片方は、「1937.6.15」発行、もう片方は「1937.10.10」発行とある。前者は百閒の別の著作『居候匆々』の発行日であるから、田村氏の誤記・混乱によるものと想像する。二種類の表紙の書影は、縦書き印刷の前者が本体の表紙、横書き印刷の後者は、函の書影とわたしは想像した。

[14] 「日本の古本屋」のサイトに表紙・背表紙の書影を出している大阪の矢野書房のその書影、及び電話による矢野書房主人からの情報によると、「本書には函はない」、表紙には「**百閒**随筆集／北溟」との墨書、背表紙には、「随筆集　北溟　内田百間著」との墨書がある。扉には「百間」（印刷？）、奥付も「百間」（印刷）とあるとのこと。扉の全体については訊きそびれたが、見知らぬ人物よりのぶしつけな質問に丁寧にお応えいただいた矢野書房主人には、心より感謝したい。この昭和 12 年 12 月刊行の『北溟』の表紙に明確に「**百閒**随筆集」との墨書があるとの指摘は、これまでどこにもないのではないか。

[15] 内田百閒［1982.04］巻末の平山三郎氏の「「鬼苑横談」雑記」の書き出しには、「昭和十四年二月・新潮社刊。装釘は三雲祥之助画伯。背文字は著者の題簽で、内田百**間**――とあり、トビラ画には、装釘者の文字で「鬼苑横談　内田百**閒**」、本文トビラは活字で「内田百**間**作」とある。」（183 頁）

1941.2	漱石山房の記[16]	百間	百間(筆)	**百閒**(筆)	百間
1941.6	百間座談[17]	百間	百間	百間(筆)**百閒 / 百閒**	百間
1942.3	我が弟子		百間	百間	百間
1944.7	戻り道[18]		**百閒**(筆)*百閒(筆)	**百閒**(筆)	百間

[16] 目次末尾に、「表紙畫　見返　扉意匠　磯部草丘」「題簽　著者」とあり、扉には、「内田百閒著／漱石山房の記／附　芥川龍之介　田山花袋　鈴木三重吉／追慕／秩父書房板」と明確に墨書されたものが使われている。表紙には、そのうちの「漱石山房の記」だけが、背表紙には、同じ「漱石山房の記」（やや縮小）と、やや小さめに別書きされた「内田百間」とある。函の表紙には、「漱石山房の記／内田百間著／秩父書房版」との印刷文字、函の背表紙には、「漱石山房の記　内田百間著」との印刷文字が。洋装本の場合、本作りの現場では、「背表紙と奥付の一致」は、かなり明確に意識されていたのではないか。背表紙は表の顔、奥付は内／裏の顔、この不一致は、善良なる公共物の場合は、あってはならないことである。扉に用いられた題簽（「百閒」表記）が、百閒自身による正規のものであり、背表紙の「百間」の「間」（墨書）は、別の者の手による加工品と見なすべきであろう。

[17] 戦時中に三省堂より刊行された本書は、百閒の座談筆記や談話筆記から成る。どこにもその旨の記載はないが、「百間」表記を含む見事な版畫による扉からは、それが谷中安規氏の装釘にかかるものと知れる。函の表紙にも背にも活字印刷による「百間」表記、本体の背表紙にも活字印刷による「百間」表記。通例だと附いていない扉の次には「日付・署名」のある漢字カタカナ文があり、署名は活字印刷による「内田**百閒**」である。奥付は活字印刷の「内田百間」。百閒本の特徴と言うべき巻末の各種「百間著作目録」が附いているが、注目すべきはその見出しが「内田**百閒**著作目録」「内田**百閒**著作編纂本目録」と活字印刷されている点である。だが、その目録を構成することになる百閒の既刊の単行本の書名に現れる名前は、本書の「百間座談」「全輯百間随筆」とどちらも「百間」表記である。したがって、百閒の刊行された数ある単行本の中に活字印刷された「百間」表記が現れるのは、1941 年 6 月に刊行された本書『百間座談』が最初ということになる。大事な点は、百閒自身が、自身の一つの著作本の中に、活字印刷された「百間」表記と「百間」表記の混在を受け容れていた（結果的に受け容れた）ということではないか。

[18] 本書は、百閒先生の戦前・戦中最後の著作であろう。目次末尾には「装釘意匠　谷中安規」とある。表紙には、「戻り道／内田**百閒**著」との墨書、背表紙には、「戻り道　内田百間著」との墨書と最下部に「青磁社」との印刷字がある。扉には、別書き墨書による「戻り道／内田百閒作」。奥付の著者名は、むろん印刷で「内田百間」とある。山本氏は参照していないと思われる田村欣実氏による田村[2020.02]をわたしもつい先頃参照出来たが、その第八章の内の「゛百間゛から゛百閒゛」という見出しを持つ部分（194 頁）では、この『戻り道』などの「**百閒**」表記について言及があるが、やはり「印刷」というプロセスを顧慮していない従来のロマンチックな想像に留まっているように思われる。内田百閒[1986.12]の解題の中で、平山三郎氏は「百間、百閒の間と閒は同字である。百間川の百間はむろん「間」だが、百間が著書その他の署名に意識して「閒」を用ゐはじめたのは、昭和十九年刊の文集『戻り道』からで、題簽に「百閒」と自分で書いてゐる。しかし奥附は活字なので「間」になつてゐる。その次の文集『新方丈記』にも同じ混用がみられるが、二十年以後は「閒」に統一した。本全集では、二十年以前の文章の中にある「百間」はすべて原著作本のままにした。御諒承願ひ

1945. 2	鬼苑横談　（四刷）			百間(筆)	百間	百間
1946.4	丘の橋　（九刷）		百間(筆)	百間(筆)	**百閒** / 百間	**百閒**
1946.5	私の先生 [19]		**百閒**	**百閒**	**百閒**	榮造
1946.7	戻り道（再版 [20]）	百間(筆)	百間(筆)	百間(筆)	百間(筆)	百間

たい。」(361 頁)と記し、内田百閒[1987.11]の解題の中では、「『戻り道』の題簽と背文字は著者の自筆で、いづれも「百閒」と署名している。この懇切な送状(活字印刷)にも「閒」とある。――この時分を境に「間」が「閒」になつたと區切りをつけてよいだろう。」(458 頁)と記している。百閒という人は、生涯を通じて「旧仮名遣い」に関しては厳格そのものであったとしても、漢字に関しては、かなり早い時期から、必ずしも我が儘は通せないというスタンスであったと思われる。活字印刷の場合は、その活字が使えるか否かという問題は著者自身の自由になるものではないということを百間ははっきりと自覚していたものと思われる。そんなに旧漢字／正字が好きであるなら、どうして当初「百閒」表記を用いることがなかったのであろうか。自筆と思われるものの中に「榮造」ではなしに「栄造」と読めるものも見かけるのである。百閒の場合、葉書／書簡／日記はカタカナを使うのは常識と言われている。通常、文字そのものには拘らなかったのではないか。日常的に略字を使うこともあったという一面を看過すべきではない。百閒について語る人は通常は百閒フアンばかりである。ワンマン錬金術師などおよそ考えられないのである。百閒とて背に腹はかえられぬ人生を果敢に生きたとわたしは想像している。

[19] 戦後、昭和 21 年 5 月に養徳社より刊行された小冊子『私の先生』こそ、活字印刷された最初の「内田百閒」本かと期待したのだが、なぜか、印刷された奥付の著者名だけが本名の「内田榮造」表記だった。

[20] 戦前・戦中最後の刊行物で昭和 19 年 7 月 30 日に青磁社から刊行された初版に対して、昭和 21 年 7 月 30 日に札幌青磁社から刊行された(再版)を比較してみると、実に興味深い。前者は目次に「装釘意匠　谷中安規」とあり、後者は「挿畫　谷中安規」とある。両者はほぼ同型同体裁の書物である。奥付を比較してみると、書名、著者名、発行者名、配給元、発行所名は同じ、発行所名だけが、東京都神田区の前者に対して、札幌青磁社とあって札幌市である。印刷者は神田の藤本さんに対して、札幌の山藤さん。定価は前者は二円五十銭(他に税十銭)、後者は十二圓。本文は挿畫に至るまで両者はほぼ同じ。どちらも函はないものの、後者には紙製カバーが付いている。表紙には、前者には筆による右書きで「戻り道／内田百閒著」、後者には、カバー、表紙ともに同じ書体で、やはり筆による右書きで「戻り道／内田百間著」とある。背表紙は、前者には筆による縦書きで「戻り道　内田百閒著　青磁社(右からの横書き)」、後者にはカバー表紙共に「戻り道　内田百間著　札幌／青磁社(右からの横書き)」。表紙の絵は、前者が「狼と人間？」、後者カバーには「一本の木の枝を担いだ猿」、中の表紙絵は、「鶴が二羽」。前者の外扉は、前者が表紙と同じように、筆による右書きで「戻り道／内田百閒作」と狼と人間に代えて花籠に水仙の絵、目次の後の内扉は縦書き活字印刷で「戻り道」、後者の外扉は筆による縦書きで「戻り道　内田百間著」、目次の後の内扉は、前者同様、縦書き活字印刷で「戻り道」。これらの表紙などの題簽と言うべき筆書きは、どこにも書いてないが、わたしからすると別人の手になるもののようである。初版の題簽が仮に百閒自身によるとすれば、再版の方は、百閒以外の人物によるものと考えられる。素人目には、善し悪しは別にして、再版の方が初版よりかなり上手なのではないかと思われる。戦前・戦

1946.8	立腹帖[21]	百閒(筆)	百閒(筆)	百閒(筆)/	百閒	百閒	百閒
1947.11[22]	菊の雨(戦後版)	百閒(筆)	百閒	百閒	百閒	百閒	百閒
1948.3	昇天(文)	百閒	百閒	百閒			百閒
1952.2	鬼園の琴	百閒		百閒			百閒
1952.4	百鬼園随筆選(一)(文)	百閒	百閒	百閒			百閒
1955.4	東京焼盡	百閒		百閒			百閒
1955.5	第一阿房列車(文)	百閒	百閒	百閒			百閒

中の初版の方が「内田百閒」、戦後の札幌青磁社の再版が「内田百間」である。奥付前の、「内田百間目録」は、どちらも「内田百間」、ただ初版の表紙、背表紙、内扉の墨書だけが「内田百閒」である。この事実は何を意味しているだろう。わたしは、漠然と思うのであるが、洋装本の書物の表の顔は、表紙ではなく背表紙。書物の内の顔は、活字印刷された奥付である。戦後のものである再版の奥付などは、もしかしたら、「内田百閒」とあってもよかったのではないか。だが、札幌の印刷所にはまだ「百閒」と印刷する態勢が整っていなかった。したがって、表の顔と内の顔を一致させる必要から、表紙・背表紙の墨書を「内田百間」とする必要があったのではないか。手許の初版の背表紙をわたしは「内田百閒」と読んだのだが、もしかしたら、そこは「内田百間」と読むべきだったかも知れないと思うのである。初版の表紙・内扉の墨書は明らかに「内田百閒」であって、「内田百間」ではない。和紙で細い背表紙なので、本当言うと「内田百閒」なのか「内田百間」なのか自信を以て識別できないのである。表の顔(背表紙)と内の顔(奥付)が不一致ではまずいという考え方があるのではないか。脚注 3 を参照のこと。なお、戦後刊行の『戻り道』(再版)の装画について、内田百閒[1987.11]の解題の中で、平山三郎氏は、「『戻り道』は戦後再版が發行された。昭和二十一年七月三十日、發行所・札幌青磁社(札幌市南八條五丁目)定價十二圓。本文の駒繪はすべて同じ、表紙とカバーの繪柄だけ新しくなつてゐる。谷中安規は昭和二十一年九月に亡くなつたから、この本の裝畫がさいごだつた。」(461 頁)と記しているが、これは誤り。再版本のカバーの繪柄は、本文駒繪 11、表紙の繪柄は本文駒繪 26 の流用(二度使い)である。恐らく、再版に当たり、初版の表紙繪、扉繪が失われた結果の苦肉の策だったのではなかろうか。「煙の尾」11 は猿の繪、「乗り遅れ」26 は鶴の繪。だが、『百鬼園夜話』の内容を確認すべく参照した内田百閒[1972.06]の解題には、同じく、平山三郎氏の「谷中安規畫伯は昭和二十一年九月榮養失調で歿した。『戻り道』裝釘と挿畫カツトが最後の仕事になつてしまつた。」(476 頁)があるので、先の記述の「この本の」の「この本」も、戦前・戦中の最後の文集としての、初版『戻り道』を指すと考えるべきだったのかも知れない。わたしは、戦後再版された『戻り道』の追加された二枚の挿畫と解したのである。

[21] 戦後、昭和 21 年 8 月に交通日本社から刊行された『立腹帖』は、ある意味「内田百閒」表記で統一された最初の百閒本と言い得る。表紙、背表紙の墨書された「内田百閒」表記、絵付きの扉の墨書された「内田百閒」表記、漢字・カタカナ印刷の「序」の「内田百閒」表記、縦書き活字印刷された内扉の「内田百閒」表記、そして活字印刷された奥付の著者「内田百閒」表記。

[22] 筆名表記に関して重要な、本書所収の「七體百鬼園」の本文では、すべて「百間」表記である。内田百閒[2003.04]所収の「七体百鬼園」も同じく、すべて「百間」表記である。

刊行された書物についての正確な書誌情報が求められる筈の図書館の所蔵図書情報、ある意味「内田百間」と「内田百閒」は無節操に混在しているというのが実情である。せめて国会図書館くらいはと思っても、本の原物に当たってみないことには、信用できないのである。思うに、書物のみならず、チラシや個人的なパンフに至るまでの印刷物で、戦前・戦中時代に「百閒」の活字印刷が現れるのは極めて稀であると言ってもいいのではないか。「百閒」の印刷文字が堂々と現れるのは、やはり戦後になってからと言ってもいいのではないかということである。戦後のある時期から、百鬼園先生の名前は、印刷文字としては「内田百閒」に統一されたのである。これは百鬼園先生の意向を反映させた結果というよりは、お国の漢字政策や、それに敏感に反応しての出版社や印刷所の事情によるところが大きいのではないかと思われる。もしかしたら、通常の印刷所は、「百閒」の「閒」という字を打ち出すための印刷用の活字を持たなかったのではないだろうか。戦前（戦中）と戦後でこうまではっきりとした「百間」と「百閒」の違いが、気難しい百鬼園先生自身の意向を反映したものだとしたら、百閒を論ずる人々が、その間の事情に触れないことなどあるのだろうか？　戦後になって、二種類の立派な内田百閒全集が異なる二つの出版社から刊行されている。その編集作業に当たった人達の間で、議論が明確になされていい筈なのである。その間の事情を説明したものが見出されない。そのどちらの全集も所蔵することもなく横着して参照しようともしない今本論攷を書き進めているわたしなどには何も言う資格はないのかも知れない。だが、内田百閒に関する膨大な文献資料にあたって、立派な「百間伝」を著し、刊行した山本一生氏の説明が、先に見た通りのものである。その大冊が刊行された後の山本一生氏宛のメールで「せっかくの機会だから、福武書店刊の全33巻からなる百閒全集を買ってしまおうかと思いましたが、それを収容する場所のことを考えて、やはり断念しました。」と書き送ったところ、氏からのメールには、「自分も所有していない、友人のO氏が持っていることを最近知ったので、全巻借りることもできたのに」とあった。

内田百閒［1979/1996］巻末の平山三郎氏の「解説」の中に、以下のようにある。「同［＝明治：筆者註］」四十年秋、岡山第六高等学校入学。翌年、志田義秀（素琴）先生が国語教師として六高に赴任、俳句熱がたかまり学業をおこたって俳句を作った。このとき俳号を**百閒**とした。郊外の空（から）川、百間川に因る。」（387頁）

この平山三郎氏とは、例えば内田百閒[1980.09]末尾の紹介によれば、「大正六年、東京牛込生まれ。法政大学日本文学科卒。昭和四十六年三月まで国鉄本社職員。『内田百閒全集』編纂。・・・」（288 頁）とあることからも知れる通り、百閒の「阿房列車」の付添人のようであり、百閒の身近にいた、百閒について知るいわば第一人者とも言うべき人のようである。内田百閒[1984]の紹介によれば、「・・・国鉄職員として雑誌「大和」を編集の折、内田百閒の知遇を得、戦後、阿房列車に同乗する。『内田百閒全集』の編集、校訂にあたる。」（191 頁）とある。いずれにしても、全集の編纂に携わった編集者であるのだから、百閒の書誌学的な研究者としては第一人者であることは間違いない。ただし、例えば、内田百閒[1980.09]巻末の「「百鬼園随筆」雑記」の中で、次のような記述を残している人でもあるのが気がかりだ。

「室生犀星の感想―「百鬼園随筆を読む」が朝日新聞の文藝欄に載ったのは翌月の十一月二十四日だ。／「百鬼園随筆は図抜けてみんな旨い、そしてどの小品も面白い、こんな随筆の旨い人は吉村冬彦でもかなはない、天下無敵かも知れない。（略）内田**百閒**といふお名前は物々しく面倒くさい人間のやうに思はれるが、これほどの物をかく作者だとは思はなかった。敢ていふ、随筆を以てしたら天下彼の右に出づる者はあるまいと。（略）かういふ名著を読み落としたら残念である。読者よ、うそだと思ふなら立読みしてもいつの間にか五六ページ読み進んで行かせる書物である。」／　と手ばなしで賞讃した。」（284 頁）

何を言いたいのかというと、引用文中の太字で表記した四箇所、①室生犀星が朝日新聞に書いた記事の標題と②「百閒」の「閒」と③「思はなかった」の「っ」と④「読み落としたら」の「と」と⑤「五六ページ」の「ジ」が正しい引用とは言えないからだ[23]。漢字は新漢字、旧仮名遣いはそのままか。新漢字だと「百間」が「百閒」になるようだ。「図抜けて」は、新聞では「圖抜けて」。本書には、表記上のルールの記載は見当たらないようだ。それよりする限り、平山氏は必ずしも信頼のおける書き手、厳密な書誌学者とは言えないようである。室生犀星の記事は、単純に「『百鬼園随筆』」である。1933 年（昭和 8 年）11 月 24 日（金曜日）の『東京朝日新聞』朝刊 6 頁の記事である。特に、今の場合問題なのは、室生犀星の記事では「百間」と表記されているのに、その引用と思しき平山氏

[23] 本論攷冒頭部で見た山本氏よりの引用に明確に表明されているように、「引用に際しては極力正確を期す」というのが、原則的に、文献学、書誌学の絶対の前提である。引用文中に「百閒」とあったら、引用の対象となった元の文の中に「百閒」があると考えるべきであろう。

のでは、「百閒」と表記されている点である。平山氏の中では、「百間」も「百閒」も違いはないということだろうか。極微文献学の立場より言うならば、平山氏の記述は必ずしも当てにならないということである。室生犀星[1934.05]所収のもののタイトルは「「百鬼園随筆」を読む」となっている。本文の方も新聞初出のものから最後の部分が大幅にカットされている。百閒にとっては大恩人である？室生犀星の戦前・戦中のものである朝日新聞の記事もそれを収録した単行本『随筆集「文藝林泉」』も百閒の表記は「百間」である。

内田百閒[1979/1996]巻末「解説」中の平山氏の記述によれば、百閒先生は、明治四十年入学の第六高、在学中に百閒先生が俳号として「**百閒**」を用いたとある。しかもその俳号の由来となる故郷の川「百間川」の方は「百閒」と異なる表記「百間」が用いられている。わたしは、自分の仮説の根拠にこの平山氏の記述を使えればと思っていたのだが、どうも怪しい雰囲気である。わたしが、本論攷冒頭で引いた、佐川章氏の『作家のペンネーム辞典』の記述の典拠が、もしかしたら平山氏のこの類いの記述にあったのかも知れないと思ったのである。つまり、わたしの仮説とは、百閒先生の筆名の「百閒」は、初めから「百閒」と表記されるものであって、「百間」はむしろ昔のやむを得ぬ印刷表記と言うべきものであった。つまり、百閒先生は、筆ないしペンないし鉛筆を用いて、初めから俳号は「百閒」と表記していたのである、したがって、小説や随筆を書く時の筆名としての「内田百閒」は昔も今も、戦前戦中も戦後も変わりなく「内田百閒」が基本であった。新聞も雑誌も単行本も印刷表記は、戦前戦中はどうも「内田百間」であって、「内田百閒」ではなかった。なにがしかの理由で、あるいは誰かの気まぐれで、戦後近くになって「内田百閒」と表記することが多くなり、そのせいで、新聞雑誌単行本などでは、いつしか「内田百閒」という表記が定着することになってしまった。他ではあまり見かけない「閒」という漢字は、われわれが誰もがよく知っている「間」という漢字の「正字」体である、といった説明が横行している。「ひゃっけん」と入力してバチンとエンターキーを叩いたら、わたしの場合は、直ちに「百閒」と化けて出てくる。続けてもう一回バチンとエンターキーを叩くと今度は「百間」と化ける。手許の小学館の本橋亀石著『現代書道三体字典』(1985 年) を見ると、「間」はあるが「閒」は記載されていない。また、手許の大部の日本書道協会の『楷行草　三体筆順字典』になると「閒[間]　カン・ケン・あいだ・ま・はざま」(337-338 頁) と同一文字に記載され、無印の「閒」に対して、「間」の方には「常・新」の記

号が附されている。「常」とは常用漢字､「新」とは新字体のこと。「本字典では、常用漢字と人名用漢字に定められた新字体であっても、古くから書きならわされてきた形の楷書体については「新」マークを附していません」（6 頁）と記されている。三体について言うと、楷書と行書に関しては、両字の違いは識別できるものの、草書になると区別がつかないのである。「内田百閒」との筆名は、印刷の場合、ある時期までは、なにがしかの理由で、「閒」の字が用いられずに、すべて「内田百間」と表記されたのであり、それは必ずしも著者の内田百閒先生の意図を反映させたものなどではない、というのが、わたしの言い分である。筆名というのは、基本的に自分の作品を公表することを前提に用いるものであろう。その意味で、自筆原稿に見られる「署名」がどうなっているかを問題にしたい。また個人的な文書のやりとり、必ずしも公表することを前提としない文書の中に登場する「筆名」を検分したく思うが、StayHome の現在では、無理な相談である。印刷公刊されているものではなしに、それらを実見している人の証言、残された自筆原稿、日記、私信の類いを見てみたいものである。和綴じ本などでは、表紙に書名などを墨書したような紙が貼り付けてある。それを、「題簽（だいせん）」と言うらしい。近代以降の活字印刷の洋装本などでもその伝統が活かされてか、屡々墨書された生の筆記字が用いられるようだ。そこでは、おそらく、手書きの自筆元原稿と同じように、「百間」でも「百閒」でも「百鬼園」でも「鬼苑」でも、好きなように記すことが出来るのである。本人自身や他の有名な人が題簽を書くものだと思うが、その場合には、通常ならば、書いた人の名前がどこかに出ている。何も書いてない場合もあるので要注意。本の装釘者が適当に塩梅したものもあるかも知れない。新聞や雑誌の記事の場合は、紙面にあるままに受け止めるしかない。書物の場合は、書誌学的には、やはり奥付の印刷表記を何より優先させるべきであろう。

内田道雄[1993.12]の中の「評伝　内田百閒」の中に､次のような記述がある。「俳諧一夜会とか苦渋会とか名付けられた句会で栄造ははじめて百間（第二次大戦後に、百閒となる）を用いた。」（16 頁）

この言い方が、最も無難なものと言えるかと思う。百閒先生は、戦後、それまでの「内田百間」という表記ではなしに、今日最もポピュラーなものとなっている「内田百閒」という表記を用いるようになった。戦前と戦後、終戦を境にしてその前と後ではがらりと変わったと言えるのである。著者本人と印刷された作品の間に、出版社とか印刷所とかの第三者が介在している点をやはり顧

慮していないのかと、わたしは思うのである。戦後派のわれわれでも、昔は手書きの原稿を出して、出てきた時の初校ゲラにいわゆる下駄（ゲタ）が履かせられているのをよく見たものである。それが校正を重ねる結果、いつのまにか、ゲタが取れて希望する活字に変わっている。インターネットの「日本の古本屋」というサイトを利用することがあるが、そこで内田百閒を検索すると著者名などが、「百閒」とあったり「百間」とあったり「百＝」とあったりするので驚いてしまう。それが、奥付の印刷表記を忠実に反映させたものならば良いのだが、必ずしも当てにならないのは、図書館の書誌データ表記の場合と似たり寄ったりである。

故郷とは有難いものではないだろうか。彼が出たいわゆる旧制岡山一中の後続をなす「岡山県立朝日高校」はネット上にHPを持ち、そこで、故郷の立派な先達であり、偉大な同窓生である内田百閒に関する貴重な情報を発信し続けているようである。「百閒の人物伝」の中には、以下のような一節があり、今問題にしている百閒先生の筆名に関して、貴重な記述を残している。

「30代には、法政大学教授となり、「冥途」「山東京伝」「花火」「件」「土手」「豹」の6篇を「新小説」に発表。その後次々と作品を発表していきました。昭和14年「鬼苑横談」を発表した頃から、「百間」を「百閒」に変更したようです。」

これが何を根拠にした記述かは不明だが、百閒先生の昭和14年2月に刊行された『鬼苑横談』（新潮社）になにか書いてあるかと思い、読んでみたが、はっきりしないのである。だが、「百鬼園俳談義　口述」の中に、「百間川」との見出しの下に、百閒自身による自らの「筆名」についての談義が展開されているので、見ておこう。

「その當時から私は「百間」と云ふ俳號を使ひ出したのであつて、その以前、「文章世界」に投書してゐた當時は、「流石」又は「廬橘子」と云ふ號を使つた。「文章世界」の前にも一二度短文を投書して、大町桂月先生の選に入つた事があるが、その題は「雄神雌神」と云ふのであつて、號は「雪隠」であつた。雪隠はその以前から大分長い間使つてゐた様に記憶する。／　百間は今でも使つてゐるので、何の事だと人に聞かれるが、岡山市の東北部に山陽本線の旭川の鐵橋があつて、その少し東に百間川の鐵橋と云ふのがある。・・・＜略＞・・・そう云ふ因縁があつて、百間と云ふ俳句の號をつけたのであるが、も一つには當時の俳號には、一碧樓、六花を初めとして何だか上に数字を冠せるのが流行つた様であつて、私は百を冠して、その流行を追つたと云ふ様な氣持もあつたか

も知れない。百間が、百鬼園になり、色々うるさい事になつて、甚だ相濟まん。」(211-214 頁)

百閒先生の意識の中では、もともとの俳号であった「百間」を昭和 14 年ころにも使っているということになって、そこには「百閒」表記については触れられていない。ところが、朝日高校の HP の記述では、『鬼苑横談』の刊行された昭和 14 年ころから、「百間」を「百閒」表記に変える傾向が見られると言うのである。この昭和 14 年は、奇しくも山本一生氏が指摘した、百閒先生の「百閒」との表記による署名が雑誌『海運報国』での連載随筆に現れることと、符合するのかも知れない。ならば、山本氏も、朝日高校の HP 記者のように、百閒先生は、昭和 14 年に、それまで使い続けた「百間」表記から「百閒」表記に切り替えたと言えばよかったのにと思われるのである。山本氏が、こうしなかったのは、今回の自らの「内田百間伝」の標題は、「戦中・戦前」を中心としたものだから「百間」表記で行くとのプランに囚われていたせいかも知れない。わたしは、今回の山本氏の新刊書の標題は、やはり、常識的に『百閒、まだ死なざるや―内田百閒伝』とした方がよかったのではないかと思っている。今回の本のカバー背表紙と裏表紙に押された二つの朱印の謂われはわたしは知らないが、どちらも「百閒」を表しているように思える。あるいは、背表紙の方のは、「百間／閒」を表していると見るべきかも知れない。とすれば、わたしが本論攷で問題にしようとしている百間→百閒の真相を明らかにしようとする作業そのものを、その背表紙の絶妙な朱印があざ笑っているのかも知れないと思えてくるのである。百閒先生にとっては、もしかしたら、百間は百閒であり、百閒は百間である。それは、本名の榮造は栄造であり、栄造は榮造である。これまで、百間フアンの多くの方たちが、百間→百閒の事実を知りながらも、敢えてそのことを殊更問題にすることなく、百閒で済ましてきたという事実もある。そして、そのことは、いったい何を意味しているのかということである。

山本氏は、ご自身の今回の大著『百間伝』の本文の最後を次の百閒の俳句を引くことで飾っている。

「三回忌には、「摩阿陀会有志」によって墓石と句碑が建てられた。／　句碑には、大正十一年作の句が刻まれる。／／

　　木蓮や塀の外吹く俄風　　百閒／／

漫評会において「百間さんは風に対して特別な関心を」と大森桐明が語り、「風といふより、音ぢやないですか」と応じた句であった。」(534 頁)

この句碑[24]を写しとったもの（石拓）が、旺文社[1984.06]の131頁に掲載されている。この句碑の元になった墨蹟が、「昭和十四年・村山古郷氏蔵」として平山三郎[1969.06] 23頁に掲載されている短冊である。百間の大正11年（1922年）作の俳句を、百閒自身が短冊に墨書したのが昭和14年（1939年）ということなのだろうが、このことは、百閒が昭和14年に、自身の俳号を「百間」ではなく「百閒」と表記することがあったことの証である[25]。

岡[1989.03]は、次のように言う。

「百閒のペンネームは、この百間川からきたのは言うまでもないが、当初は「間」の字を使っていた。戦後は百閒に統一されている。百鬼園というのは、その語呂合わせだ。」（13頁）

また、このようにも言う。

「面白いのは『百間座談』で、書名は「間」だが、印刷の中で序文の署名は「閒」。この頃が「間」から「閒」へこだわり出した頃にあたるだろう。」（86頁）

さらに、次のようにも言う。

「「百間」という号を使い出したのは、この頃で、それまでは「流石」や「廬橘子」や「雪隠」を使った。よく寝そべりに行った百間川にちなんだのはもちろんだが、当時数字を頭にもってくる号がはやったせいでもあるという。「百間」はやがて「百閒」となる。「閒」は「間」の旧字だというから、それにこだわったのだろう。」（136頁）

昭和16年（1941年）6月に三省堂より刊行された『百間座談』の「序」に、「内田百閒」という活字印刷が現れているとの報告は貴重である。

それに対して百閒先生の「生誕120年記念出版」を謳っている湯原[2008.09]

---

[24] 句碑そのものの見事な写真が、湯原[2008.09] 147頁に掲載されている。

[25] 平山[1969.06]には、「俳号を、百閒とこの時分に決めたのである。・・・百間、百閒、は同字である。」（30-31頁）として、「（註・4）」を附し、「字源によると、間は閒の俗字、とある。何時頃から意識して「閒」を用い出したか。昭和十九年刊随筆集「戻り道」の表紙と扉には自分で書名と「内田百閒著」と題簽しているが、奥附などの活字は間になっている。戦後初めての文集「新方丈記」にも同程度の混用がみられ、二十五年刊「贋作吾輩ハ猫デアル」から閒に統一した。」（45頁）とある。この「統一した」とは、これ以後、百閒自身は、「百間」表記を使うことはなかった、という意味だろうか。それとも世間に内田百閒の筆名として、新たに「百間」表記が出回ることがなくなったという意味だろうか？　よく見かける「戦後は百閒に統一されている」の類いの記述の意味がきわめて曖昧である。どこかで誰かが「以後内田百閒は「内田百閒」表記に統一する、「内田百閒」表記を使った者は罰せられる」といった大号令が出されたというのであろうか。

の中の百閒伝を担当している佐藤聖氏[26]の文章の中に、谷中安規氏の「昭和二十一年五月二十八日」の百閒宛の書簡の宛名が「内田百閒先生」となっていることが、その写真とともに、紹介されている（104 頁）ことは興味深いものである。その後、佐藤氏の文に、以下のように明記されることは、今の場合、きわめて重要なものと映るのである。

「ところで、「百間」が「百閒」へと、門構えの中が「日」から「月」へと変わるのは、昭和十四年の『鬼苑横談』の扉と昭和十九年の『戻り道』の表紙の書き文字であるが、奥付などの活字は「百間」になっている。戦後はほぼ「百閒」に統一されている。暗闇が嫌いな百閒自身は、この変更についてなにも語らないが、お日様とお月様とどちらがえらいか、それはお月様にきまっている、お月様が隠れたら、夜は真っ暗になってしまう、という一口噺[27]を紹介するばかりである。」（109 頁）

最後の下線部はどこを典拠としたものか、わたしには不明である。ところが、本論攷を一通り脱稿した後で、田村欣実[2020.02]を手にしたところ、第八章の「〝百間〟から〝百閒〟」の見出しを持つ部分に、次のようにあるので、驚いてしまった。

「百閒の筆名はもともと〝百間〟であって、郷里岡山の百間川にちなんだ命名であることはよく知られている。ところが戦後、いつの間にか〝百閒〟に変えている。／　昭和十四年二月『鬼苑横談』（新潮社）が刊行され、この背文字は著者の題簽で〝内田**百間**〟とあるのに、扉には装幀者三雲祥之助の書き文字で〝内田百**閒**〟とある。そしてまた本文扉には活字で〝内田百**間**作〟とある。また、昭和十九年七月の戦時下、『戻り道』（青磁社）が刊行され、題簽、背文字は著者自筆で、いずれも〝百**閒**〟と署名しており、この送状（活字印刷）も〝百閒〟とあるのに、戦後

---

[26] この佐藤聖氏についてはわたしは知るところはないが、たとえば内田百閒[2003.04]などのちくま文庫の＜内田百閒集成＞（全 24 巻？）の編集者を務めた方かとも思われる。その集成も精査していないわたしには、佐藤氏の記述の典拠は知れるはずもないのかも知れない。滑川[2003.12]の編集後記には、「ご遺族や佐藤聖氏をはじめとする多くの方々、執筆者の皆様、そして結果的に執筆されなかった方々にも大変お世話になりました。」とある。

[27] いまだわたしはこの一口噺の所在を突き止めていないが、百閒最晩年の著作の一つ『夜明けの稲妻』収録の「暗所恐怖」の「一　暗所恐怖」の書き出しに「暗い所はこはい。／　大體だれも同じだらうと思ふ。／　しかし暗闇と云つても、家の外にゐる時は、月のない晩でも星明かりで足許は見える。」（内田百閒[1973.04] 185 頁下段）と矛盾する噺ではある。「日」より「月」がえらいから、「百間」から「百閒」に変えたという理屈も、ある意味愉快だ。

昭和二十一年七月の同書の再版（札幌青磁社）ではまた〝百**間**〟に戻っている。／

若い頃には筆名ひとつとっても、文字にこだわり続けたのに、五十七歳になって一つの名に絶対的に固執していないのはいささか不思議な気がしてならないのだが、この変更について百間は何も語っていない。／　百閒は、お日様とお月様とどちらがえらいか、それはお月様にきまっている。お月様が隠れたら、夜は真っ暗になってしまう、というばかり。／　昭和二十四年六月『百鬼園夜話』（湖山社）になってどうやら〝百**間**〟で統一したようだ[28]。」（194 頁）

これは別に田村氏による引用ではない。下線部など、あまりにも似たフレーズに驚いてしまった次第。田村氏は、この佐藤氏の記事に言及している様子もない。ならば、両者の共通の拠り所となる、わたしの知らない、何かがあるのだろうか。是非知りたいものである[29]。ただし佐藤氏の「百閒伝」を骨子に成り立っているかの湯原［2008.09］は、しっかり参照しているらしいのは、そこに収録された佐伯一麦氏の「百閒の月」を、田村氏が言及し、その結びの一文「この戦争中に、百閒は、それまで故郷の百間川にちなんでつけた百間の筆名を、門構えに月の百閒に変えた。」（31 頁）を踏まえて、佐伯氏の「小説家らしい解釈」（194 頁）と紹介しているからである。百閒の惨憺たる『東京焼盡』の中で、時折挿入される闇夜の月の描写は、見事な華であり、「東京焼盡」と月を明確に対比させた佐伯氏の感性は確かに注目に値する。だが、実際のところは、果たしてそうだろうか。

公刊された活字印刷は、すべて百閒先生の意志の反映ではないことを知るべきである。しかも時が時、「東京焼盡」の戦中・戦後の、百閒先生が錬金術に熱中していた時代ではなかったか。有から有を生み出す百閒得意の秘法ではなかったか。『東京焼盡』を含め、百閒の夥しい量の日記を読むと、ほんとうにその時代、百閒は必死に錬金術を駆使していたようである。錬金術とは換言す

---

[28] 書誌的に百閒関連本をカバーしているいわば第一人者とも称すべき田村氏が、昭和 26 年 4 月に刊行された『百鬼園夜話』に対して、そのように言うことの根拠が不明である。『百鬼園夜話』を参照してみる必要があるかも知れない。

[29] 内田百閒［1975.04］所収の「摩阿陀十三年」の最後の部分に、「僕が歌つて聞かせよう。／　お月さまはえらいな／　お日様の兄弟で／　まん圓になつたり／　弓の様になつたり／　はるなつあきふゆ／　日本ぢゆうを照らす／　　この歌に関聯した一口噺がある。／　お日様とお月様と、どちらがえらいか。それはお月様がえらいにきまつてゐる。お日様は明かるい晝間に出てゐるのだから何でもない。お月様は闇夜を照らして明かるくしてくれる。お月様が隠れたら、夜は真つ暗になつてしまう」（162 頁）

れば、書かずに原稿料を生み出す秘術のことだとは、百閒フアンならば誰もが知っていることではなかったか。

さらに、ここらでわたしは言っておくべきかと思うのだが、戦前・戦中・戦後にかけての自身の著作の出版物などの、筆名表記をめぐるある意味「混乱」と言うべき状況を、百閒自身はどのように受け止め、それに対して、どのように対処したのであろうか。一つの単行本の中に、「百閒」もあれば「百間」もある。肝腎の「奥付」を見たら、活字印刷で、やはり「百間」である。仮にわたしが、百閒の立場だったら、せっかく立派な単行本が刊行されたのに、そのような「混乱」を内包・放置してしまった。おそらく断腸の思いを抱くことだろう。だが、百閒自身がそのような振る舞いをしたとの痕跡を見いだせないのである。私設マネージャーの如き者を抱え込んでいるような気難しい百閒と伝え聞くわれわれにしてもそう思うのである。すべては百閒先生の思うが儘の所産だったということなのか。百閒先生は、そんなささいなことには目くじらをたてたりしない、やはり文字通りの大人だったのだろうか。

Ⅲ．内田百閒に言及する者たち

さて、戦前・戦中の「百間」⇒戦後の「百閒」は、百閒自身による記事や書物にのみおこるものではない。百閒について言及する者たちの記事や書物においても顕著となるのである。楽天的な者は、「前者に基づいて後者が起こる」と済ますかもしれないが、そうではないだろう。すべては、同一の規制に基づいて起こったと考えるべきなのである。百閒在世の昔からの知人たちの記事や書物の中においてもその現象が如実に現れるのである。

本節の見出しに「内田百閒に言及する者たち」とした。本論攷を書きつつあるこのわたしも言ってみれば、そういう者たちの一人である。だが、わたしは、山本一生氏のしたように、内田百閒を「内田百間」表記を用いて名指すことはしない。わたしは今から五十年ほど前に大学に入学し、とにかく時間の許す限り、乱読した。借りて読むのではなく買って読むのだが、たいがいは廉価な文庫本である。それは今でもたいがい手許にあるが、内田百閒の著作に関しては、『昇天』（新潮文庫 1948 年）、『贋作吾輩は猫である』（河出市民文庫 1951 年）、『百鬼園随筆選　その一』（新潮文庫 1952 年）、『第一阿房列車』（新潮文庫 1955 年）などの四冊がとりわけ思い出が深い。文庫の有難い点は、巻末に必ずと言ってよい程に、名だたる文藝評論家による「解説」が附されていることである。本

文を読んで、あるいは邪道かも知れないが、読む前に、その「解説」を読む。それによって、自分の読書をより効率的により明確に堅固なものに出来ると思っていたのである。そっけない単行本は大きくて、嵩張って、なおかつ高価である。したがって貧しい大学生にとっては文庫本万歳、文庫本大好きということになって、わたしもその例外ではなかったのである。ところが読んでいると、わかってくるのだが、文庫本にも解説の附いていない味気ないものもあるようなのだ。今挙げた百閒本四冊のうち、『百鬼園随筆　その一』には、解説はない。これは続きものだから「解説」はその続きが完結する巻に附されるのかと考えて、同じ年の数日後に刊行された『その二』（新潮文庫 1952 年）を見る、だが、やはり「解説」はない。まだ途中だからか、と思って、『その三』『その四』を探しても、どうやら、それは『その二』止まりだったようで、解説には遭遇出来なかった。ところが、この新潮文庫の『百鬼園随筆選』（新潮文庫 1938 年）には、戦前・戦中の刊行の旧版と言うべきものがある。こちらは、当然ながら「内田百間」名義である。中身は新版の『その一』と同じく、「官名出張旅行」から始まって「志道山人[30] 夜話」に至るまでの全 37 本から成る。

平山［1986.03］所収の中村武志氏の「べんがらや盛衰記―先生のお手紙で回想する―」はとても興味深い読み物である。今回あれこれ百閒ものを渉猟したわたしとしては、その中の次のような一節こそ、百閒の生涯を考える上で貴重な情報ではないかと思った。

「戦前の先生は、高利貸しと昵懇になられて、彼に追いかけられ、責めたてられながらも、「小債鬼に偏く完済する」という錬金術を主とされていたが、現在は高利貸し自身その日の主食にも困って駆けずりまわっているのだから、そ

[30] この「志道山人」も数ある百閒先生の別号の一つである。百閒の筆名を考える上で、昭和 14 年 10 月刊行の『菊の雨』所収の「七體百鬼園」がとりわけ興味深い。「表記は原則として新漢字、現代かなづかいを採用しました。」と巻末の「編集付記」にある内田百閒［2003.04］所収の冒頭部を引くと「署名の百間は私の雅号であって、本名は別にある。百間の音を延ばして百鬼園とした名前も大分方方に使い散らした。ただ音だけの洒落であって、字の意味には何も関係もないのであるが、うがった事を考えて見たい閑人がいて、私がいつもお金に困る事を知っているものだから、借金取りが百人も来るので百鬼園と云うのかと念を押したりする。」（210 頁）となる。また、昭和 14 年 2 月刊行の『鬼苑横談』所収の「百鬼園俳談義」中の「百間川」（211 頁）も無視できない。百閒自身が、国の「国語政策」などに無関心でなかったことは、例えば、本書所収の「五段活用」（264 頁）などからもわかる。昭和 16 年 6 月刊行の『百間座談』には、「國語と國字問題」（44 頁）も収録されている。

の後を追いかけるわけにはいかない。／　したがって、掘立小屋に移られてからの錬金術家の先生は、高利貸しと絶縁し、また狭い小屋では無から有を生みだすことは不可能だから、既往の有から有を作りだす方法に転じられた。つまり、編纂本、再剛本、増刷本をお出しになったのである。掘立小屋から三畳御殿に移られるまでの三年間、二十一年四月から二十三年五月までに出版された本は十五冊だが、著作本は、「新方丈記」（新潮社）一冊のみである。この錬金術は、その後も続いていて、二十三年十月から四十三年十二月までに二十三冊を数えることができる。」（300-301 頁）

平山[1986.03]巻末の平山氏による「百閒先生の手紙」には、森田たま氏の有名な『もめん随筆』中の「奈若」と「屋島の狸」という文から、百閒先生の書簡二通が回収されると紹介されている。昭和 11 年に中央公論社から刊行された森田たま氏の『もめん随筆』の昭和 13 年 11 月刊行の第二十一版が手許にあるが、確かに、「奈若」というエッセイと「屋島の狸」が収録されていて、百閒先生のカタカナ書簡が二通回収確認出来る。だが、森田氏の文の中には、前者には、「百鬼園日記帳」とか「内田先生」とか「百鬼先生」は、出てくるが、「百閒」とか「百間」といった言葉は残念ながら出てこないのである。後者には、「志道先生」は出て来るものの、やはり「百閒」や「百間」は出てこないのである。だが、『もめん随筆』には、「芥川さんのこと」と「七月廿四日」というエッセイが二つ続いて収録されている。前者は森田氏が百閒に連れられて、田端の芥川家に訪問した時のエピソード、後者は、当然ながら芥川の死をめぐってのものである。前者の冒頭は「内田百間先生に連れられて、」（69 頁）で始まっている。また、芥川のせりふとして「見つけたり蛙に臍のなき事を。内田百間には臍がないのさ」（79-80 頁）が記されている。後者にも「・・・あれはこの前百間先生と御一緒に行つた・・・」（86 頁）とある。ところが、昭和 26 年に出た新潮文庫本の昭和 45 年の二十四刷の『もめん随筆』がやはり手許にあるが、前者のそこでは、「内田百間」が「内田百閒」（57,64 頁）に変えられ、後者の「この前百間先生と」が「この前百閒先生と」（69 頁）に変えられているのである。これは、どのように考えたらよいだろうか。「統一されている」と言う。これは百閒自身のなにがしかの意向に沿ったものと言えるのだろうか。如何な権力者と言えども、他人が書いたものの表記まで統一することなど出来る筈がないのである。

また百閒と交友の深かった宮城道雄氏の宮城[1937.11]の中に「夜長漫筆」と

いう随筆がある。その書き出しは「私と内田百間氏とは、お互に弟子と師匠に代り代りになるやうな間柄である。と云ふのは、内田百間氏は葛原幽（しげる）氏、米川正夫氏などと時時箏の合奏をされる。・・・」（4 頁）である。同じその随筆は、旺文社文庫の宮城[1980.11]にも収録されているが、その書き出しは「私と内田百閒氏とは、お互いに弟子と師匠に代る代るになるような間柄である。というのは、内田百閒氏は葛原齒（しげる）氏、米川正夫氏などと時時箏の合奏をされる。・・・」（113 頁）となっている。この変化をわれわれはどう理解したらいいのだろう。旧仮名遣いが新仮名遣いに改められている上に、登場する人名の「百間」→「百閒」、「幽」→「齒」といった変化が見られるのである。

これはもはや、著者の意向とか好みとはまったく別の力による変化と言うべきものなのではないか。仮に百閒先生ご自身が「百間」と原稿用紙に書き付けても、新聞や雑誌、あるいは単行本に印刷された場合には、みな「百閒」に変化させられているということなのではないか。むろん、原稿用紙のマス目に、鉛筆だかボールペンだかオモトの万年筆だか、筆であろうが、どんな字体で表記しようとそれは勝手であろう。だが、一度編集者の手を経由し、印刷所で印刷された段階で、原則それは否応なく変化させられてしまうのではないか。「わたしの筆名はもともと百間であって百閒ではない」と言おうが、それは原則通らないようになっているのではないか。

この場合がそうだが、いわゆる戦前戦中に初出として印刷公表されたものの中に現れる「百間」という表記が、戦後、再び印刷公表されることになると、原則として「百閒」となる。また戦後初出として印刷公表されたものでは、原則として「百閒」となっている。

この二つのことがらは明らかに異なるものだが、その両者が渾然と受け止められて、多くの人を惑わしている。そこに戦後も 20 年以上も元気に生きながらえた百間／百閒を筆名とする人物の意向がどれほどに関与したものだろうか。本論攷でわたしは、百間、百閒の違い関係を問題にしたのであるが、本人にとって「百閒」も「百間」も別の筆名だとは考えられてはいなかったと言うべきなのでは。「百間」という表記が都合が悪くて使えなくなりましたので、あまり見かけない漢字を含みますが、これからは一律「百閒」と表記することにしますので、ご承知置き下さい。印刷公表を担当する係から、本人におそらく伝えられたのではないか？

戦中戦前は「内田百閒」という表記は使えなかったが、戦後は逆に「内田百間」という表記は使えなくなったと言わんばかりである。きっとそうなのだろうとわたしは考える。一時期「森鴎外」という表記を見かけることがあったように思うが、昔も今も森鷗外は「森鷗外」だ。これは鷗外自身の意志とか好みとか関係ないのではないか。

百閒の著作単行本の巻末には、大概、＜百閒著作目録＞が附されていて、実に便利である。例えば、戦後も戦後、1952 年 2 月 29 日（閏年か？）に三笠書房から刊行された『鬼園の琴』、内田［1952.02］の場合だと、巻末に「内田百間著作目録　其ノ一　著作本」（301 頁）、「内田百間著作目録　其ノ二　編纂本」（303 頁）、さらに「昭和二十一年以降刊行目録」との添書きが附されて「内田百間著作目録　其ノ三　再刷本 増刷本 編纂本」（304 頁）、「内田百間著作目録　其ノ四　著作本」（306 頁）とある。当然ながら、百閒の名前の入っている書名は、すべて「百間」表記である。一方、最晩年に属する 1968 年 1 月 31 日にやはり三笠書房から刊行された『麗らかや』、内田［1968.01］の場合だと、「内田百閒著作目録」（271 頁）として「其ノ一　著作本」（271 頁）、「其ノ二　編纂本」（273 頁）、「昭和二十一年以降刊行目録」との添書きが附されて「其ノ三　再刷本 増刷本 編纂本」（274 頁）、「其ノ四　著作本」（277 頁）、その後にさらに「装釘意匠者一覧」（279 頁）があって、奥付の頁に至る。当然ながら、『麗らかや』は、「其ノ四　著作本」の最後に、値段と発行日の欄が空白のまま、記載されている。百閒の名前の入っている書名は、すべて「百閒」表記である。

むすびにかえて：新聞、雑誌、単行本

おそらく、新聞、雑誌、単行本という三種類の表現媒体を並べて見た時に、基準となるのが、やはり新聞なのではないか。一般日本人の目に触れる度合いから言っても、毎日、しかも朝・夕の二回お目見えする新聞、雑誌はもしかしたら ParisScope みたいな毎日出るものもあるかも知れないが、通常は週刊誌、月刊誌、季刊誌、年刊誌とお目見えの頻度は新聞に較べて落ちる。単行本は和書に限っても毎日何百冊、何千冊と出ているかも知れないが、書き手別にするとお目見えの頻度は格段下がる。したがって、固有名詞の人名などの表記は、新聞の表記を基準とするのではないか。それぞれが、同じ人物を別の表記で扱うとしたら、社会に多大の混乱を引き起こすのではないか。おそらく大手の新聞によって協会のようなものが結成され、その協会内で、新聞での人名表記な

どの統一が計られるはずである。その際の基準となるのが、国の国語政策ではないだろうか。本論攷で問題にした内田百閒の人名表記が、戦前・戦中と戦後で大きく変化したというのは、筆名の考案者にして使用者である作家その人の好みとか意向とかは二の次で、国の国語問題に関わる政策をもろに反映せざるを得ない新聞協会などでの取り決めによるところが何よりも重要だということである。人の名前をつける場合、勝手につけていいものではない、ということをわれわれは知っている。人名として使っていい漢字は制限されているのである。これは戸籍上の問題であるのだが、おそらく筆名、すなわちペンネームもそれに準じた扱いを受けるモノに相違ないのである。戦前・戦中のそれが、比較的大雑把なものであったのに対し、戦後のそれはより細かく、よりデリケートなものになったのではないか。その結果、内田百間と表記できてたものが、出来なくなり、内田百間さんは、内田百閒と表記しなければならなくなったのではないか。それがいわば本論攷におけるわたしの辿り着いた結論である。様々な規定を引用して、そのことを論証する余裕は今のわたしにはないが、例えばネット上で偶然遭遇したものに、以下のような文書があった。

(1) 2010 年 7 月 29 日の日付を持つ安岡孝一氏による「人名用漢字の新字旧字／第 68 回「間」と「閒」」
（https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/column/ .....）

(2)「新聞表示の現状と制定経緯―常用漢字表との異同を中心に―」（金武伸弥）第 11 回漢字小委員会
（https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/kanji_kako/11/pdf/siryou_2.pdf）
「Ⅰ　新聞表記の基準
原則　わかりやすい口語体で、常用漢字、現代仮名遣い、送り仮名の付け方によって書く。
＊漢字の使い方

① 漢字は常用漢字に掲げられたものを、その音訓の範囲内で使う。字体も常用漢字表、人名用漢字表（1997 年制定まで）に掲げられた字体とする。
［例］澁澤榮一　→渋沢栄一

② **常用漢字表、人名漢字表にない漢字（表外字）は正字体を使うのを原則とする。**
［例］　森鴎外　→森鷗外
（注）新聞によっては表外字も略字体を使っている。

③ 常用漢字・音訓の範囲で書き表せないものは、なるべく別の言葉や字に置き換えるか、仮名書きにする。やむを得ず表外字を使う場合は読み仮名を付けるのを原則とする。

［例］　塵芥　→ごみ　繃帯　→包帯　挨拶　→あいさつ　膠原（こうげん）病

④ 表外字（傍線）でも固有名詞およびこれに準ずるものは使ってよい。

［例］」　松尾芭蕉　駿河湾　奄美大島　鞍馬天狗　交響曲「悲愴」」

とりわけ、わたしの興味を引いたのは、(2) の中の太字で表記した②の部分である。内田百間／百閒の場合、「間」が人名漢字表にない漢字（表外字）だとすると、正字体の「閒」を用いる必要があるのではないか。例に上がっている森鴎外／鷗外の場合、「鴎」が人名漢字表にない漢字（表外字）だとすると、正字体の「鷗」を用いる必要があるということのようである。新聞などでは、画数は多いけれど、森鴎外ではなく「森鷗外」とあるのを目にするのは、そのように説明される。

結局現代にあっては、例えば内田百閒の人名表記そのものを主題にした文章を除く通常の文章では、原則、その人名は「内田百閒」表記に統一されることになるのではないか。これは、例えば、「森鷗外」という人名表記の場合と同様である。作家／翻訳家としては「森鷗外」という呼称で統一されているのが現代の実情である。鷗外や鷗外の家族が、そのことに満足しているか否かとは直接には関係ないのである。

内田百閒の場合、戦前・戦中の「百間」⇒戦後の「百閒」との推移が明瞭に見てとれるとしたら、それは直接的には、上にみた国や特定の団体の方針の推移を反映したものであって、著者内田百閒自身の「百間」好みから「百閒」好みへの推移によるものではないということになると言えるのではないか。戦後に訪れた表現表記の自由化の具現というより、逆にむしろ、過度の混乱を避けるという目的に立った、表現表記上の規制の所産と見なすべきものである。そして全く一般的であった戦前・戦中の「百間」表記そのものも、端から内田百閒の嗜好とは関わりのない、古い時代の一つの規制の所産、換言すれば擬制（ぎせい）というものだったのかも知れないとの想像もむげには消し去ることは出来ないのではないだろうか。伝え残された数多くの内田百閒の写真は口元をへの字にして、大きな目玉で他者を圧倒、睥睨している。それはおそらく他者に自身を決めつけられることを「イヤダカラ、イヤダ」と断固と拒否する内田百

閒が何者かのキセイの所産に過ぎない「百間」ないし「百閒」に甘んじていることが出来なかったからこそ、「百鬼園」「鬼苑」などの変名も同時に積極的に多用することになったと言えるのではないか。

仮に「内田百間」という表記を使い続けたく思っても今や使えないのではないか。そういう視点は、どなたもお持ちではないようだ。たぶん、森鴎外も駄目、通常は森鷗外と表記しなければならないのだ。遺族がそれを使いたくても、たぶん新聞は使ってくれないのである。新聞は、使える文字が限られている。

百閒自身、自身の筆名を、「内田百間」として表記し、使用していたのであるならば、「百間」は、筆名の「正規表現」というべきものであった筈だ。だが、時至って百閒自身によって「内田百閒」として表記、使用されることがあるようになったとすれば、百閒が正規表現と見なされ、「百間」はいわば略字表現に堕すことになったのであろう。戦後の「内田百閒」の台頭が「内田百間」を完全に駆逐した結果、内田百閒の筆名として「内田百閒」表記が完全に定着することになった。これにあたっては、国の国語政策ないし新聞協会などの団体による＜漢字使用の取り決め＞の歴史的な推移が大きな外的規制として働いている。漢字の使用は個人的には自由だが、公共的には（徒なる混乱を避ける立場よりするならば）、必ずしもそうではない。引用に際しての典拠の明示とその引用の厳格さが重要であろう。

最後に改めて本論攷の目的をまとめておきたい。

・百閒の筆名としての「百間」が、故郷の川「百間川」より発想されたことが事実だとして、その筆名の「百間」に対して「百閒」表記が出現したのは、いつなのか？
・その痕跡はどこまで遡ることが出来るのか？
・つまり、現存する手書きの日記ノート、書簡、原稿、及び印刷物の中で、どこまで遡ることが出来るのか？
・「百間」表記から「百閒」表記への移行が実現し、最終的に百閒の筆名としては「百閒」表記として定着するようになったのは、いつのことなのか？
・どうして、何故、「百間」表記から「百閒」表記への移行が起こったのか？

だいたい、以上のようにまとめることが可能と考えるが、百閒本人の強い意志に基づくなのか？については、百閒自身よりの証言は得られないようである。百閒の傍に生活していた者たちによる証言も得られないようである。誰も、百閒には尋ねなかったもののようである。

・「百間」も「百閒」もそもそも別ものであるとの意識が百閒自身にも必ずしも明確にあったわけではないことが、一番ありそうなことである。ある時期から、「百間」表記も「百閒」表記もどちらも自由に使用出来るようになったが、次第に「百閒」表記が多くなり、結果的に「百閒」表記に統一されていったということなのだろうか？

百閒自身のうちに、「百間」表記でなければならない、いや「百閒」表記でなければならないといった二者択一的な意識が必ずしも明確ではなかった、と考えるのが、自然であるように思われる。複数の著作のうちに、両方の表記が混在しているという事実が何よりもそのことを証立てているように思われるのである。頑固・厳格をもって鳴る百閒が、その混用、混在を受け容れていたと考える他ないのではないだろうか。作家の誰もが「個人全集」を持つものではない。全集を編纂する企画が持ち上がった際に、その作家名をどうするかという問題が先ず起こった筈である。百閒の場合は、最晩年に本人が用いていた「内田百閒」が当然のように選ばれたのだろう。「内田百閒全集」。その中には、当然ながら、本名である「内田榮造」名義で公になった著作も、また数少ないものの「雪隠」名義で公になったものも収録されているのである。一方、その作家の内田百閒を、例えば、本名の「内田榮造」の名前で言及している関係者もいれば、「内田百間」として自らの著作の中で言及している著述家たちもまた数多く存在しているのである。有名・非有名を問わず、その者たちの書いたものが再利用される時に、そこに現れる内田百閒を指示するあれこれの名称の全てが自動的に「内田百閒」に変更され、修正されて、統一されることなどは、およそ考えられないことである。だが、不思議なことに「内田百間」だけは例外であり、一律「内田百閒」に変更され、修正されているのが現状のようである。そのこと事態も、わたしなどよりすれば、およそ神をも畏れぬ不遜な行為と考えられるが、仮に百歩譲ってその事態を大人しく受け容れるならば、それは、百閒先生を指示する「百間」も「百閒」も、決して別の名前ではなく、例えば「澁澤榮一」と「渋沢栄一」がそうであるように、「両者は完全に同一の名前の単なるちょっとした別表現」であり、「一方がやむを得ぬ事情[31]で使えない、いや使わない方がいいと考えられたからだ」と好意的に考えて済ます他ないのである[32]。（了）

---

[31] その「やむを得ない事情」とは、「不必要な混乱を回避すること」以外には思いつかない。

[32] 「間」と「閒」を、「旧／古字と新字」と捉えると、戦後に顕著となった、内田百閒の筆名を廻って起こった「間」⇒「閒」の推移を説明しにくいが、その両者を、「略字と正字」と

【略号・参考文献】

朝日新聞社出版局図書編集室
［1986.04］：編『朝日新聞の漢字用語辞典』朝日新聞社
安倍能成
［1927.10］：編『綱島梁川集』岩波文庫
出隆
［1973.02］：「百鬼園先生と二山博士」『内田百閒全集 第九巻』（講談社）月報 9
伊藤整
［1964.10］：著『作家論Ⅰ』角川文庫
内田道雄
［1993.12］：編『内田百閒』（新潮日本文学アルバム 42）新潮社
内田百閒 / 百間 */ 榮造 **（1889.5.29 ～ 1971.4.20）
［1937.12］：著『北溟 *』小山書店
［1938.09］：著『百鬼園随筆選 *』新潮文庫
［1939.02］：著『鬼苑横談 *』新潮社
［1939.12］：著『冥途・旅順入城式 *』新潮文庫
［1940.05］：著『地獄の門 *』新潮文庫
［1941.02］：著『漱石山房の記 *』秩父書房
［1941.06］：著『百間座談 *』三省堂
［1942.03］：著『我が弟子 *』秩父書房
［1944.07］：著『戻り道 *』青磁社
［1945.02］：著『鬼苑横談 *』（四刷）新潮社
［1946.04］：著『丘の橋』（九刷）新潮社
［1946.05］：著『私の先生 **』養徳社
［1946.07］：著『戻り道 *』（再版）札幌青磁社
［1946.08］：著『立腹帖』交通日本社
［1947.11］：著『菊の雨』（戦後版）新潮社

捉えて、「初めのうちは色々な事情があって、略字の「間」を使っていましたが、戦後になって、その色々な事情が解消された結果、これからは、堂々と「正字」である「閒」を使うことが出来るようになりました。ご迷惑をおかけしたかと思いますが、これからは略字を用いた「百間」とはおさらばして、正字を用いた「百閒」で行かしていただきます。どうぞ、よろしく。」ということになったのであろう。

［1948.03］：著『昇天』新潮文庫
［1951.04］：著『贋作吾輩は猫である』市民文庫（河出書房）
［1952.02］：著『鬼園の琴』三笠書房
［1952.04］：著『百鬼園随筆選（一）』新潮文庫
［1954.06］：著『漱石山房の記』角川文庫
［1954.10］：著『禁客寺』ダヴィッド社
［1956.05］：著『百閒随筆 Ⅰ』角川文庫
［1968.01］：著『麗らかや』三笠書房
＜［1971.10-1973.04］：著『内田百閒全集』（全 10 巻）講談社＞
［1972.06］：著『内田百閒全集 第五巻』講談社
［1973.04］：著『内田百閒全集 第十巻』講談社
［1975.04］：著『摩阿陀會』津軽書房
［1978/2004.03］：著『東京焼盡』中公文庫
［1979/1996.09］：著『御馳走帖』中公文庫
［1980/1997.01］：著『ノラや』中公文庫
［1980.09］：著『百鬼園随筆』旺文社文庫
［1980.10］：著『続百鬼園随筆』旺文社文庫
［1981.01］：著『無絃琴』旺文社文庫
［1981.05］：著『冥途・旅順入城式』旺文社文庫
［1982.01］：著『随筆新雨』旺文社文庫
［1982.03］：著『百鬼園戦後日記 上巻』小澤書店
［1982.03b］：著『丘の橋』旺文社文庫
［1982.04］：著『百鬼園戦後日記 下巻』小澤書店
［1982.04］：著『鬼苑横談』旺文社文庫
［1982.06］：著『船の夢』旺文社文庫
［1982.09］：著『随筆億劫帳』旺文社文庫
［1984.01］：著『贋作吾輩は猫である』旺文社文庫
［1986.12］：著『新輯内田百閒全集 第二巻』福武書院
［1987.06］：著『新輯内田百閒全集 第六巻』福武書院
［1987.11］：著『新輯内田百閒全集 第十一巻』福武書院
［1989.07］：著『新輯内田百閒全集 第三十巻』福武書院
［1990.03］：著『間抜けの実在に関する文献』福武文庫

［1990.11］：著『サラサーテの盤』福武文庫
［1991.04］：著『内田百閒』＜ちくま日本文学全集＞筑摩書房
［2002.11］：著『立腹帖』＜内田百閒集成 2 ＞ちくま文庫
［2003.01］：著『サラサーテの盤』＜内田百閒集成 4 ＞ちくま文庫
［2003.04］：著『百鬼園先生言行録』＜内田百閒集成 7 ＞ちくま文庫
［2004.05］：著『百鬼園日記帖』＜内田百閒集成 20 ＞ちくま文庫
［2004.08］：著『百鬼園戦後日記』＜内田百閒集成 23 ＞ちくま文庫
［2019.05］：著『百鬼園戦前・戦中日記』（上）（下）慶應義塾大学出版会
旺文社
［1984.06］：編『百鬼園寫眞帖』旺文社
岡将男
［1989.03］：著『岡山の内田百閒』岡山文庫 137
川村二郎
［1983.10］：著『内田百閒論　無意味の涙』福武書店
木下杢太郎
［1936.06］：著『藝林閒歩』岩波書店
佐藤聖
［2021.01］：編『百鬼園先生―内田百閒全集月報集成』中央公論新社
田村欣実
［2020.02］：著『こだわり百閒の噂ばなし』文芸社
綱島榮一郎（梁川）
［1905.10］：著『病閒録』金尾文淵堂
滑川英達
［2003.12］：編『文藝分冊 総特集内田百閒』＜ KAWADE 夢ムック＞河出書房新社
平岩八郎
［1972.04］：「百閒先生と東京新聞」『内田百閒全集 第四巻』（講談社）月報 4
平山三郎
［1965.01］：著『實歴阿房列車先生』朝日新聞社
［1969.06］：著『百鬼園先生雑記帳』三笠書房
［1986.03］：編『百鬼園の手紙』旺文社文庫
本多助太郎

［1949.01］：編『朝日新聞七十年小史』朝日新聞社
宮城道雄
［1937.11］：著『垣隣り』小山書店
［1980.11］：著『随筆集 春の海』旺文社文庫
宮本正尊
［1975.03］：著『明治仏教の思潮　井上円了の事蹟』佼成出版社
室生犀星
［1934.05］：著『随筆集「文藝林泉」』中央公論社
森田たま
［1936.07］：著『もめん随筆』中央公論社
［1951.12］：著『もめん随筆』新潮文庫
山本一生
［2021.06］：著『百間、まだ死なざるや―内田百閒伝』中央公論新社
湯原公浩
［2008.09］：編『別冊太陽 内田百閒 イヤダカラ、イヤダの流儀』平凡社
米川正夫
［1940.04］：著『酒・音樂・思出』河出書房
［1962.02］：著『鈍・根・才　米川正夫自伝』河出書房新社

【附記】ネット上の田村欣実氏が主宰する「内田百閒の世界／私設自家用百鬼園の圖書館」は、山本一生氏も参照・紹介しておられるが、驚くべきサイトである。わたしの場合、特に「百閒著作本の圖書室」というのが、興味深く、百閒の著作本が、表紙などの書影と共に、「書名、番号、著者・編集者名、発行年月日、出版社名、版型、価格」情報を付した状態で編年體で並んでいるのである。実際に書物を所蔵しない者にとってはまことに有用なサイトであるが、惜しむらくはその書影が時に必ずしも鮮明ではなく、また何よりも気になるのは「著者・編集者名」の記載が必ずしも正確ではなく、典拠も奥付と結びつけられていないようにも思われ、全面的に信頼を寄せることができないのではないかと思われる点である[33]。所蔵本の書誌的データがきちんと採取されていな

[33] 百閒の著作の書影と言うと、湯原［2008.09］148-154 頁が、いずれも文字が鮮明で「間」か「閒」も識別可能で、まことに有用である。

いのではないか。

【補遺】百閒先生がいくら正字旧漢字が好きだからと言って、何でもかんでも正字旧漢字に書き改めるのはいかがなものか？

手許の三省堂の『全訳　漢字海　第二版』(2006 年) には、「門 4」の箇所に「間」という字が立項されている (1491 頁)。そして、その直後に「閒」が並べて置かれ、その後に、その字の内実の説明がほぼ一頁にわたって為されるが、すべて「間」という漢字が用いられている。「間」は「教 2」とされ、JIS コード (2054)、ユニコード (9593) が付されているが、「閒」の方には、そこは空欄となっている。そして、寂しいことに「間」と「閒」の関係・差異についての説明も何一つ付されていないのである。「閒」は「間」と同一の使用されない漢字のような扱いである。一方、内田百閒先生ご愛用の辞典であるらしい『字源』であるが、手許の角川書店刊の『字源』(増補初版：1955 年) だと、やはり「門部四畫」の箇所に「閒」が立項されている (2080 頁)。ほぼ 2 頁分を費やして詳細に説明されるが、その説明の後に、「間」という字が立項されているが、ただ、「閒 (前條) の俗字」との説明があるばかりである。ということは、「間」は「閒」の俗字であり、「閒」は「間」の正字ということになるのだろうか。われわれは、本来は「閒」という字を使うべきところ、その俗字である「間」を使うようになっているということだろうか。現代にあっては、正字の「閒」は、「百閒」などの人名としてのみ生きながらえているということのようである。

【附記 2】今夏の二カ月ほどの本論攷の作業の最終段階の本当に最後の最後に遭遇したものが、末尾に「七三・一・七」と日付の入っている出隆[1973.02]である。結局最後の最後に辿り着いた佐藤聖[2021.01]の中で遭遇したのであるが、この佐藤聖氏の編集になる便利な「内田百閒全集月報集成」も、山本一生[2021.06]と同じ中央公論新社の刊行物だとすれば、結局は、本論攷はやはり敬愛する先輩の山本一生氏に終始導かれての作業だったということになる。内田百閒の戦前の「百間」表記から戦後の「百閒」表記への移行に関心を寄せて、なにがしか言及する者たちのうちの、誰一人の記述の中に、この出隆[1973.02]に言及しているものがなかったというのが、わたしの非経済的な遠回りの理由である。これは、わたし自身が旗印に掲げる「極微文献学」の説明としてよく用いる「あれこれ大騒ぎした結果、結局判明したのは、単なる誤植一個」の類いである。この出隆氏の 3 頁足らずの文章こそ、本論攷の作業のための出発点となるべきものだった。この出隆[1973.02]は、おそらく内田百閒に拘わる文

献を渉猟尽くして成ったと思われる山本一生[2021.06]の著者の山本一生氏の目を掠めてしまったのだろうか。また内田百閒の全著作に誰よりも精通している筈のヒマラヤ山系こと平山三郎氏も迂闊にも看過してしまったのだろうか。また、同じく内田百閒通の証したる佐藤聖[2021.01]の編者たる佐藤聖氏も、ネット上で恐ろしいまでの「内田百閒図書館」を開設維持しておいでの田村欣実[2020.02]の著者でもある田村欣実氏の鋭い眼光をも潜り抜けたというのであろうか。出博士は、そこで、「今度の全集の題名では、どうしたわけでか「日」が「月」に伸びているようだが、古くは「日」だったし、古い僕には「月」よりも「日」の方が暖かく親しい。」(2 頁) とし、「・・・内田君は、六高の俳句会でも校友会誌などでも、「本字」ではなしに普通の日本字で自分の雅号だか俳号だかを「百間」と書いていた。しかし、すくなくも戦後には、彼自身、その「日」を「月」に伸ばして「百閒」と書いたり、その著書などに「百閒」と印刷させていたことも、たしかである。だが、もっと前から、門構えの中を月に伸ばしていたような気もする。では、いつごろから内田君がその日を伸ばして月と書きだしたか。それを調べて、それでも月報に報告して、お茶を濁そうと決心した。」(2 頁) と明記している。出氏は、その方法の一端を、以下のように記している。

「・・・この年末から年始にかけて、本棚のすみから彼の寄贈して来たお墨つきの著書三十余冊を取り出して、まずその表紙と扉頁と奥付けとに、その著者名がどう印刷され、どう墨書されているかを、まず調べて、著作年代順に、日とあるか月になってるか、こまかに書きとってみた。」(2 頁)

既に米寿を越えておられる出隆博士 (＝二山博士) のお正月の StayHome を利用しての何ともみごとな極微文献学である。そして出博士は「調査の結果だけを報告する」(3 頁) として、以下のように記している。

「一、処女出版『冥途』以来、敗戦前までに出した本では、表紙や扉頁や奥付けに見える木版または活版で印刷された印刷された著者のペン・ネームの門構えの中は、だいたい「日」すなわち「百間」。ただし、昭和十四年刊の『鬼苑横談』の扉頁、三雲祥之助氏装の木版刷り、および同十八年刊の『戻り道』の扉頁の木版刷り[34] でだけは、「日」ではなく「月」すなわち「百閒」となっている。

[34] 百閒の筆名表記を考える上で貴重な個人的情報をもたらす出隆[1973.02]であるが、この『戻り道』についての記述は明らかな混乱を示している。戦前・戦中の初刊本の方は、昭和 19 年 7 月刊であり、「木版刷り」と言い得るのかはともかくとして、表紙、扉の墨書はど

一、敗戦後に出たものでは、だいたいどこでも「日」ではなく「月」すなわち「百閒」と印刷されている。ただし、二十二年刊行の『新方丈記』新潮社版、富本憲吉氏装の表紙と扉頁との木版刷りでは「日」になっていて逆にその奥付けの活版刷りの著者名は「月」になっている。

一、僕宛の寄贈本の扉頁に墨書された自署名では、『冥途』のは「内田栄造」。以後昭和十一年七月刊の『有頂天』までの数冊はすべて「百間」。だが翌十二年六月刊の『居候匆々』にだけは署名なく、ついで同十二年十月刊の『随筆新雨』以後敗戦前までの十余冊のうち「栄造」または「栄」とある二冊を除く他の十冊ほどは、印刷では「日」なのに僕への自筆では「月」に伸びて、「百閒」となっている[35]。そして、戦後に寄贈されたもの数冊では、門も日も月もなく、すべて「百鬼園」となっている。」（3 頁）

【附記 3】平山三郎著『わが百鬼園先生』（六興出版　1979 年 9 月）を読む機会があった。その「後記」の中に、「・・・間と閒は同字である。筆で揮毫する時など、閒の方が書きやすかったのだろう。」（219 頁）とあった。なお、山本［2021.06］は、第 73 回読売文学賞【評論・伝記賞】の受賞作となった。

〈キーワード〉 内田百閒、ペンネーム（筆名）、極微文献学、旧字旧仮名遣い、書誌学、新聞、近代日本

ちらも「閒」表記である。

[35] やや曖昧な表現で昭和 12 年 10 月刊の『随筆新雨』の百閒の自筆署名が「閒」表記であるとすると、百閒自身は、昭和 12 年以来、個人的には「閒」表記を用いていたことの一つの証とはなる。わたしは、昭和 12 年 12 月刊行の『北溟』の書物の表紙に、墨書「百閒」表記を確認しているが、出情報は、それをさらに二カ月遡らせたと言えるのではないか。百閒は、昭和 12 年頃には、個人的には既に「百閒」表記を用いることがあったと言えるのであろう。それが、百閒の筆名として、安定的に「内田百閒」表記に統一されていくのは、やはり戦後になってからということであるが、必ずしも百閒自身の強い意志によるものと言うよりは、むしろ世の中の某かの趨勢によるものと考えたい。わたしは、その一番大きな要因として新聞に於ける「漢字」の取り扱いの諸制約を最初から考えているが、それを裏付けるような証言が、やはり佐藤聖［2021.01］に収録されている平岩八郎［1972.04］である。平岩氏は、『都新聞』（『東京新聞』の全身）の社員であったようで、「それにしても戦後の新聞では、百閒先生の随筆が一番多くのった新聞は東京新聞であろう。」（6 頁）と記し、さらに「これは戦後長い間他の大新聞が依頼原稿にも制限漢字、新かなの適用を墨守したのに、東京新聞は特定の筆者にはつとめて原文通りを尊重して、しかも一編の原稿もかなり長いのをのせたりしたことが、気に入られたのであろう。正宗白鳥氏なども、よく東京新聞は書きやすいといわれた。」（6 頁）と記している。